

42650  
教科書文庫

4  
810  
51-1941  
200030  
1921

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

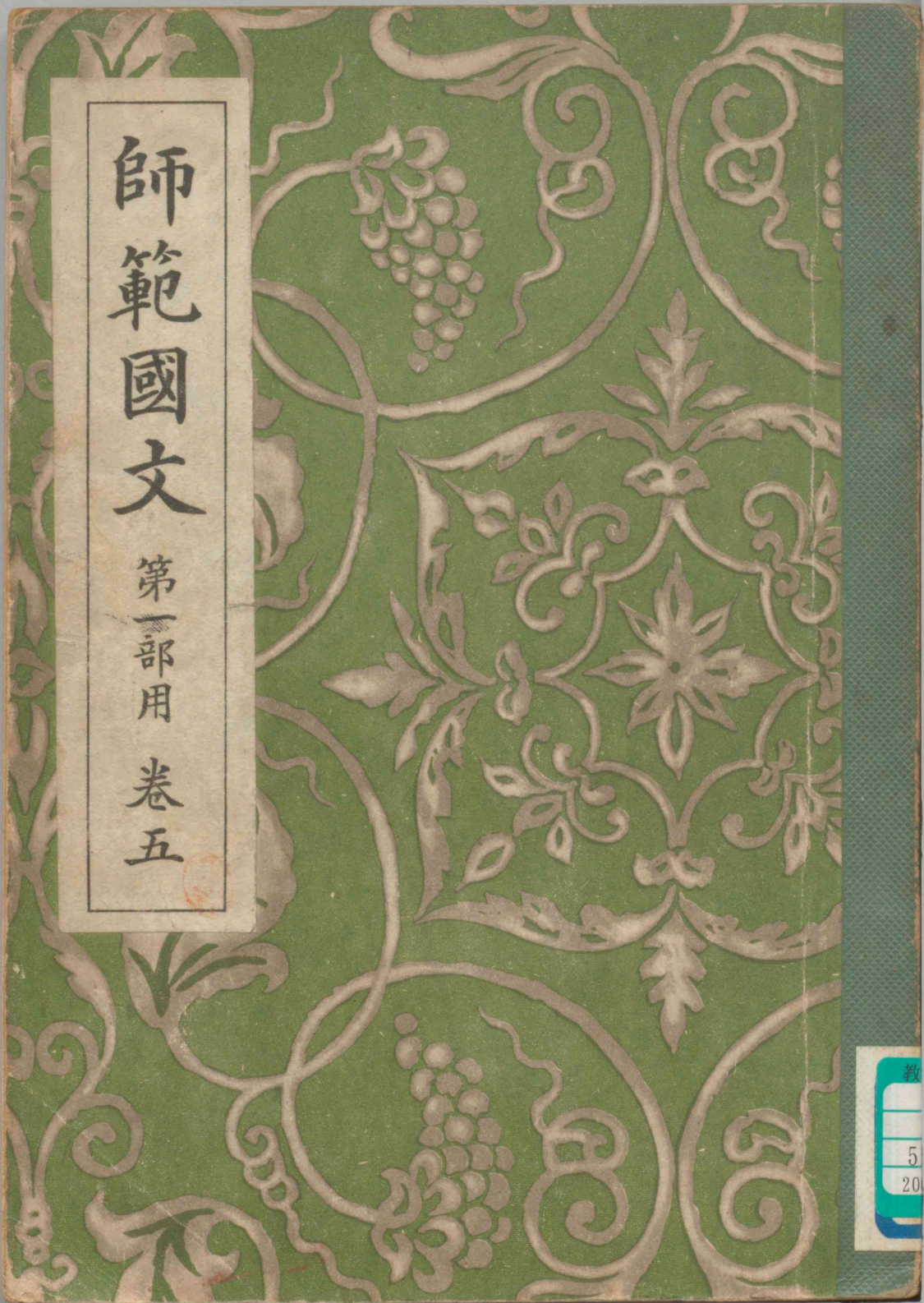
Inches  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
cm  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20  
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



師範國文

第一部用  
卷五

0 1 2 3 4 5  
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



資料室

375.9  
Y019

文部省檢定  
昭和三十六年十一月三十日  
中學國語教科書用

吉田彌平編  
石井庄司補訂

# 師範國文

第一部用



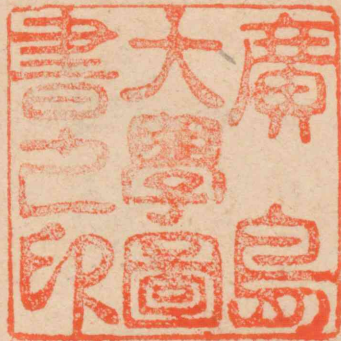
中等學校教科書株式會社

教科書文庫  
4  
810  
51-1941  
2000301921

\*\*\*\*\*  
修正三版  
\*\*\*\*\*

広島大学図書  
2000301921  



師範國文 第一部用 卷五

目次

①	惠まれたる日本	鶴見祐輔 一
②	春の心	二
③	忘れ難き日	姉崎嘲風 四
④	隠岐の御遷幸	〔天 平 記〕 一九
⑤	長谷部信連	〔平家物語〕 二六
⑥	永恆の瞬間	高神覺昇 三五
⑦	夜叉王	岡本綺堂 三九
⑧	新緑	五十嵐 力 五三

目次

一



九	斑鳩の宮	三木露風
一〇	法隆寺	高濱虚子
一一	牡丹	突
一二	人の問に答ふ	藤田東湖
一三	ソクラテスの遺訓	穂積陳重
一四	ヴェスヴィヤス	森鷗外
一五	地圖を眺めて	吉村冬彦
一六	登山	田部重治
一七	鷺	土井晚翠
一八	百蟲譜	横井也有
一九	震災雜詠	永田秀次郎
二〇	東路の旅	〔東關紀行〕

二一	月雪花	芳賀矢一
二二	秋霧	北島親房
二三	月の夜さむ	〔新葉和歌集〕
二四	縮むものの力	相馬御風
二五	日本民族の覺悟	田中寛一



目次 終

師範國文 第一部用 卷五



鶴見祐輔

辯論家

衆議院議員

明治十八年(三)

西群馬縣生

アルプス

イタリー北境の

連山

布哇

北太平洋に散在する群島

一 恵まれたる日本

鶴見祐輔

紺碧の空に銀線細く曳くアルプスの山々、萬里の潮風椰子の葉に鳴る布哇の岸邊、さては古城の白堊葡萄畑のうちに隠見する伊太利の籬落、半天の風車細雨に煙る和蘭の牧場、とりとりに詩興を唆る世界の國々をそゞろ歩きの旅の幾年、假寢の枕重ねての後、大和島根の岸に歸りつく放浪の子は、欄に倚つて近づき來る故山の姿を仰ぎ見つゝ、ある異常なる感激に身振ひする。それは新しく日本を發見することなのだ。

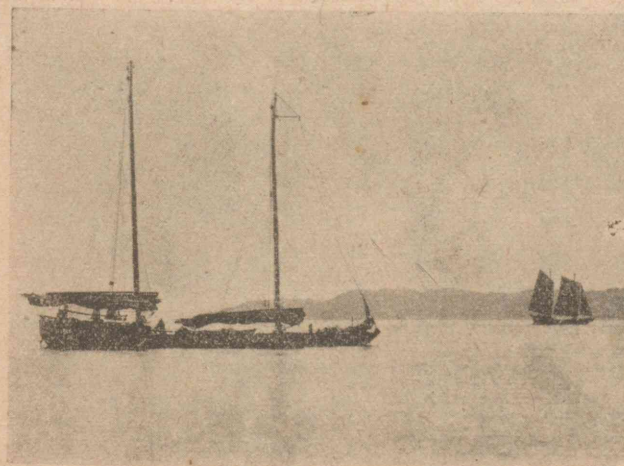
一 恵まれたる日本

一



芙蓉の峯  
富士山  
六連島  
山口縣豊浦郡彦  
島村の鴈島  
音戸の瀬戸  
廣島縣安藝郡倉  
橋島と銅岬との  
間の水道  
須磨・明石  
共に神戸市の西  
海岸になる名所

太平洋より歸り來る遊子の前に聳ゆる芙蓉の峯、朝鮮海峽より歸り來る遊子の前に連なる六連島、さては歐洲より瀬戸内海に歸り來る遊子の前に、白浪花の如く散る音戸の瀬戸、翠黛夢に微笑む須磨・明石。  
船進み、景移る。遊子は陶然として、我、吾を忘れる。  
何といふ美しい線であらう。何といふゆたかな色彩であらう。  
藍色の波の上を白帆がすべつてゆく。磯馴松の林のうちに茅葺屋根が見える。白い障子に日



瀬戸内海

があか／＼と照つてゐる。白砂の上に曳上げた漁船のまはりに、細い絲の網が一杯にひろげてある。日傘をさして村の娘が行く。見馴れては、忘れるともなく忘れてゐた日本の優秀性が、ひし／＼と遊子の胸に迫つてくると、こゝに新しく日本を發見し、日本人たる自分自身を發見する。  
「民族の興亡はその住居する土地の氣候に因る。」と或西洋の學者は喝破した。まことに道理ある言葉である。あまりに暑き南國は、天惠饒に過ぎて人心を弛緩せしめ、あまりに寒き北國は、風雪の威強きに過ぎて人間を萎縮せしめる。春夏秋冬の序宜しきを得たる温帶地にのみ文化と文明との起る、理當に然るべきを觀る。

しかしながら、私の近年痛切に感ずることは、氣候と相並んで、風

風光



去歲  
昭和七年  
ベニス

イタリー北部の  
都會  
水の都といはれ  
てゐる  
アペナイン  
アルプス山の支  
脈  
イタリーを縦斷  
してゐる

光がその民族の優劣に偉大なる影響をおよぼすといふことである。狂濤岩石を衝く夕には我が心荒び、春陽落花に微笑む朝には人の心は和やかである。況や緑波疊の如き長汀曲浦の夏蜜柑の實黄に色づく山路の冬、春は吉野満山の芳葩、秋は眼もはるかなる日光の紅葉、誰人か日本の山河のうちに生きて、生を歡喜し自然を愛するの情無きを得るものぞ。我が日本民族の思想と生活と文化との一切は實にかゝる豊潤なる自然の賜物である。

去歲の秋、私は南歐伊太利の山河に彷徨ひ、始めてこの小さな半島の中から、かゝる數多き天才と英雄との群がり起つた理由を心讀した。天蓋の如き大空は、ベニスの町の工人の磨く玻璃のやうに碧かつた。アペナインの山々には橄欖の林が微風に波

シーザー

ローマの大政治家

(西曆前100-前

四四)

ダンテ

伊太利の大詩人  
神曲の作者

(西曆三六五-三

一〇)

ラファエル

伊太利の大畫家

(西曆四八三-五

三〇)

ガリレオ

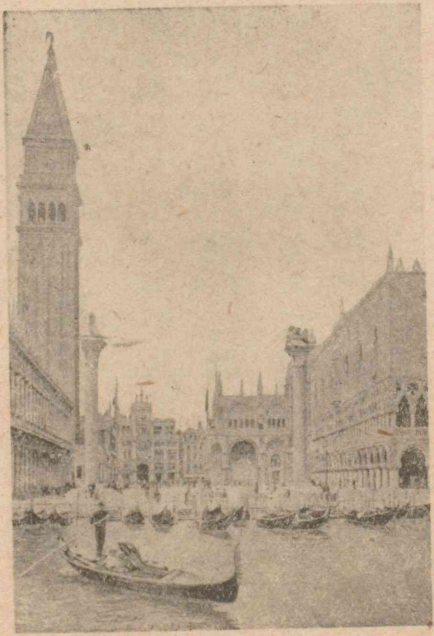
伊太利の有名な  
星學者

數學者

(西曆一五四一-一

六四

立ち、葡萄畑と小麥畑との續く平野には、白練を敷きたる如き流が悠然と光つてゐた。處々に古城、宮殿、さうして壯大なる天主教寺院。手の染まるやうな藍色の海。その總べての物象の上に惜しげもなく降りそゞぐ赤い日射し。かゝる氣候と風光とのうちから、シーザーも出で、ダンテも生まれ、ラファエルも育まれ、ガリレオも現れたのだ。それにつけても、日本民族は幸運であつた。天は日光と雨とを惜しむことなく吾が國土に恵み、地は深き海を以て吾が國を外



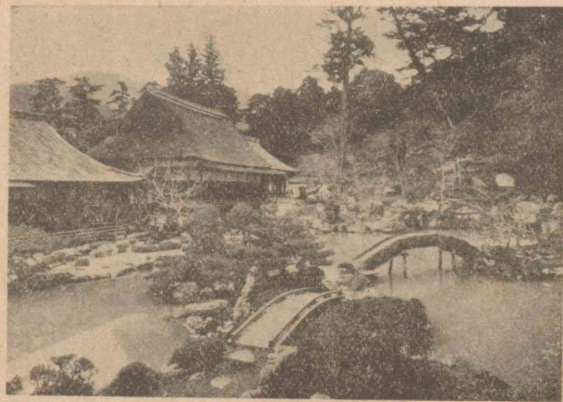
スニベ



敵より防衛した。大氣は貿易風となつて四邊の海に迫る外船を追ひ、山と田と川と海とは人間の求むるまゝなる諸の食物を

堆く盛りそなへ、四時に互つて飢うることなからしめた。

外敵の脅威と生活の壓迫とから解放された日本民族は、日射しの暖なるまゝに戸外に出でて、最も健全なる生活を營んで來た。それが日本建築であり、日本衣服であり、日本庭園であつた。かゝる温雅なる風俗を作り出でたる日本民族は、その眼に秀麗なる山河の色を見、その耳に諧調ある松籟潮音を聴き、そ



醍醐寺寶院の庭園

の肌をに五月の薰風を感じ、その鼻に朧月夜の梅が香を嗅いだ。官能の生活に於て、日本民族の如く恵まれたる境地に住してゐるものを、世界の何處に求め出すことが出來よう。天の日本民族を愛撫する、至れり盡くせりといふべきである。かゝる自然の恩恵に浴してゐる日本民族の心の底には、いつとしもなく強烈なる愛郷愛國の情操が芽生えた。それは單純なる理念より生ずる政治意識でも、利害に萌す經濟觀念でも、個人的感情に胚胎する家族思想でもなかつた。あゝ、我等の祖先はこの島國に住んで幸福であつた。彼等は花に歌ひ、朝日に祈つた。彼等の皮下に躍る血潮の中には、夕日に映える芙蓉の峯と、春雨に煙る巖島の情調とが流れてゐた。殊に島國の民の特色である鎖國は、我等の祖先の心をこの國土

日本の自然は、  
いかに優美であらうか。  
自然の恵みは、  
いかに豊かであらうか。



に集中凝結させた。たゞこの國を見たゞこの同胞を見て三千年の歲月を送り迎へるうちに、彼等はわき目もふらずこの國とこの同胞とを愛するやうになつた。永い時期を隔てて折々渡來した異邦文化は感受性の強いこの國民を驚かした。しかしその異邦文化を一度己が國土に流入せしめると、彼等はまた水門を閉ぢてこれを自己の固有文化のうちに融合せしめる努力をつゞけた。かゝる外邦隔絶性と自己集中性とは、實にこの日本人を作り上



(筆平儀山穴) 峯蓉芙

支那の文化  
朝鮮

アテネ  
ギリシヤの古代  
の都市

ペリクレス  
(西暦前四五〇—前  
四五二)



戦のレピモルテ

げて來た天恵であつた。我々には氣の散らない民族生活をつづける暇があつたのである。多くの意味に於て、日本民族は古代希臘民族と類似してゐる。かの古のアテネの民が、城壁を以てその小さき都市國家を閉鎖して自己に沈潛し、以て固有の希臘精神と希臘文化とを築き上げたことが、この大和島根を環る海路を閉ぢて、日本精神と日本文化とを作り上げた我等の祖先と酷似してゐる。アテネの哲人政治家ペリクレスが希臘の市民はその國を愛慕する爲には、唯一目その都市を眺むるの



テルモピレー  
バルカン半島の  
尖端部にある

みにて足る。といった言葉は、直ちに移して日本國民に適用することが出来る。かの美しき希臘の山河は、かゝる熱烈なる愛國心を希臘市民の心の中に喚起したのであつた。彼等も亦日本民族と同じく氣候と風光とに恵まれてゐたのである。故に彼等は、古今千年の時の流を凌ぐ藝術と哲學とを創造すると共に、波斯百萬の大兵をテルモピレーの險に沮み得た三百の勇士を生んだのである。彼等の愛國心は、楠家一門の子弟を率ゐて吉野の孤壘を守つた正行の心に似通つてゐるではないか。あの蕞爾たるアテネが七十萬の人口をもつて、三千年後の今日、なほ地上十億の人類に光被するが如き偉大なるものを創造したことを思ふと、國土の民族に與へる影響の甚深なことが今更のやうに感得される。

惟ふに、日本民族の運命は、我等の祖先がこの美はしき山河に居を占めた時に約束されてゐる。我々の自然美に對する憧憬とその憧憬が生んだ典雅な性情と、國土に對する燃ゆるが如き愛着と、衣食住のわづらひの少かつたこととから生じた理想主義的人生觀と、自然を客觀的に眺める習慣から生まれた現實正視癖と、現實正視から來た利用厚生思想とは、三千年の鎖國生活のうち、鍛鍊陶冶されて、玲瓏たる一箇の寶玉と化したのである。かゝる不可思議にして特有なる思想と性格とを有する日本民族は、今や新しき世界の黎明を前にして、驚くべき役割のために選み出されようとしてゐるのである。(歐米大陸遊記)

## 二 春の心

賀茂真淵



加藤宇萬伎

江戸の歌人  
安永六年(一四七)

歿  
年五十七

桔梗が原

長野縣東筑摩郡  
洗馬附近の原

武田信玄と小笠  
原長時とが合戦  
した處

小澤蘆庵

京都の歌人  
享和元年(一四六)

歿  
年七十九

加藤千蔭

江戸の國學者  
文化五年(一四六)

歿  
年七十四

うらけとけいなき春のこころより

にむひりぞるる山てくらげれ

加藤宇萬伎

そひふのまじすげね平少なり

あまの風をよききらうづの原

小澤蘆庵

にわかづは月と花をれにぼら夜よ

ひとり霧よわなこのおとつふ

加藤千蔭

まふぶがけにひきくふ守いりたしこ

かすむあしめの面をこきりれ

村田春海

心あてしむしとら雲はふもとより

なもけわろく晴るし小じのね

木下幸文

ゆきとくふしとれ花ある寺はらむ

松原ししかわきまわりなり

香川景樹

ゆきよりこちうちりれむ佐ほけの

せしれよりけりしそはなれ

村田春海  
江戸の國學者  
文化八年(一四七)  
歿  
年六十六

木下幸文  
京都の歌人  
文政五年(一四七)  
歿  
年四十三

香川景樹  
京都の歌人  
天保十四年(一四三)  
卒  
年七十四  
贈從五位



加納諸平  
和歌山の歌人  
安政四年(二五七)  
歿  
年五十二

橘曙覽  
福井の歌人  
明治元年(二五八)  
卒  
年五十七  
贈正五位

姉崎嘲風  
名は正治  
宗教學者  
文學博士  
東京帝國大學名  
譽教授  
帝國學士院會員  
明治五年(二五三)  
京都市生

雲からわがわがにありほを

加納諸平

あふらせりくらうかり

橘曙覽

けりたす障あつていれそ

よごをうづめてそくさうひうま

三 忘れ難き日

姉崎嘲風

嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔、春光麗かに南

友  
高山樗牛

清見瀉  
静岡縣庵原郡興  
津町の海岸

三月  
明治三十三年

風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し故國に別れしは恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客巾を翻せる友船上艇中相隔りては面も定かならず、姿も終には見分かぬ迄に消失せぬ。「健在なれ。」再び早く相見んと。別の言葉は尙耳に響き、最後の握手今尙掌に感ぜられつゝも、見渡せば白鷗飛交ふ海の面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りなき。嗚呼、かくて相別れし我が友今何處にかある。彼はその夜、西の方足柄を過ぎ、清見瀉の邊にさすらひ來り、恰も此の海樓に宿りて離別の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて五年後の今日、此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤影蕭然欄に憑りて無限の感に沈ましむ。

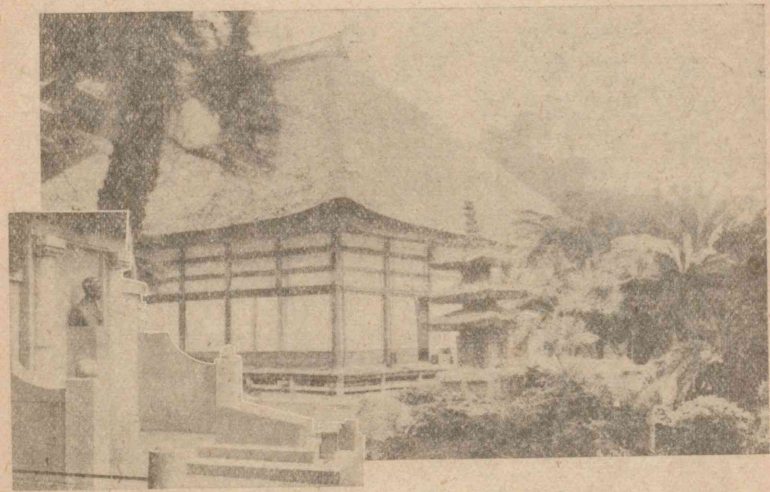
三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を



踰えて駿州に入り、清見關の海樓に宿りて離別の悶を遣りたりき。其の夜月明らかに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。中宵欄に憑りて靜かに君を思ひ、轉、人生遭逢のはかなきを歎きぬ。

人生遭逢のいともはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に遺し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せば有渡の山影微かにして、袖師の松原、雨に朧なり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、すべて暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。此の海、此の地、是彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、是彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光昔の儘にして、彼が友は已に歸り來つれど、彼の姿は今や尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫で、今夜、五年前

有渡の山  
靜岡縣安倍郡久能山の別稱  
袖師の松原  
三保松原の一部  
埋骨の地  
靜岡縣安倍郡不二見村龍華寺



龍華寺と牛標の墓

の今日の別離を偲んで彼が遺文に對す。嗚呼、我此の流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか憂懷を遣らん。されど徒に憂ふるを已めよ。人に百歳の齡なく、世に別離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は却つて懷慕の樂しみを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。友こゝにあり、悠久の夜亦こゝにあり。彼が遺文餘薰新



にして我が思慕日毎に彼に通ず。清見灣頭今宵雨しめやかにして夜靜かなり。形は見えねど彼は我と語り、我は彼に接し、松風濤聲また時に款暗に入り來る。嗚呼平生憂を同じうせる彼と予と、先世何の契縁かある。身世匆忙として相移り、際遇すに相異なり、生死幽明相隔つといへども、彼と我と長へに相伴なはん。

三世  
過去・現在・未來

我が友  
京都帝國大學名譽教授文學博士  
藤井健治郎

歲月水と流れ去つて五年の昔を今に返す由なけれども、神相接しては生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見瀉の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一夜の眠に入らん。(停雲集)

### 隱岐の御遷幸

大子記

三月七日  
後醍醐天皇元弘二年(一九三二)  
後醍醐天皇

東洞院  
烏丸の東の通り

櫻井  
大阪府攝津國三島郡島本村の字山崎驛の西方八幡  
石清水八幡宮

明くれば三月七日、千葉介貞胤、小山五郎左衛門、佐々木佐渡判官、入道道譽五百餘騎にて、路次を警固仕つて、主上を隱岐國へ遷し奉る。供奉の人としては、一條頭大夫行房、六條少將忠顯、御介錯は三位殿御局ばかりなり。其の外はみな甲冑を鎧ひ、弓箭を帶せる武士ども、前後左右に打圍み奉りて、七條を西へ、東洞院を下へ、御車を軋れば、京中、貴賤男女小路に立並びて、正しき一天の主を下として流し奉ることのあさましきよ。武家の運命今に盡きなん。と、憚る所なく、いふ聲巷に満ちて、只赤子の母を慕ふごとく泣悲しみければ、聞くに哀を催して、警固の武士も諸共に皆鎧の袖をぞぬらしける。櫻井の宿を過ぎさせ給ひける時、八幡を伏



應化 佛が時に應じて  
本身を異體に變  
化して出現する  
こと

湊川 今神戸市の内、  
福原  
右に同じ

印南野 兵庫縣播磨國印  
南郡あたりの野

源氏の大将 源氏物語須磨の  
巻にある光源氏  
の事

明石の浦 ほのくゝとあか  
しの浦の朝霧に  
鳥隠れ行く舟を  
しぞ思ふ  
(古今集讀人不  
知)

拜み、御輿を昇据ゑさせて、二度帝都還幸の事をぞ御祈念ありける。八幡大菩薩と申すは、應神天皇の應化、百王鎮護の御誓あらたなれば、天子行在の外までも、定めて擁護の御眸をぞ廻らさるらんと、たのもしくこそ思し召しけれ。湊川を過ぎさせ給ふ時、福原の京を御覽ぜられて、平相國清盛が四海を掌に握つて、平安城を此の卑濕の地に遷したりしかば、幾程もなく亡びしも偏に上を犯さんとせし驕の未だ果さずして、天の爲に罰せられしぞかしと思し召し慰む端となりけり。印南野を末に御覽じて、須磨の浦を過ぎさせ給へば、昔源氏の大将の、此の浦に流され、三年の秋を送りしに、波只こゝもとに立ちし心地して、涙落つとも覺えぬに、枕は浮くばかりになりけりと、旅寢の秋を悲しみしも、理なりと思し召さる。明石の浦の朝霧に遠くなり行く淡路

杉坂

兵庫縣播磨國佐  
用郡江川村大畠  
より岡山縣美作  
國英田郡證甘村  
に通ずる峠  
中山峠ともいふ

久米の佐羅山 岡山縣美作國苦  
田郡(もと久米  
南條郡)にある  
津山市の西南郊

鷄唱 鷄聲茅店月、人  
跡板橋霜。  
(唐の溫庭筠)

三尾 鳥根縣出雲國八  
東郡美保關村

瀉、寄せ來る浪も高砂の尾上の松に吹く嵐跡に幾重の山川を杉坂越えて美作や久米の佐羅山さらく、今はあるべき時ならぬに、雲の山に雪見えて、遙かに遠き峯あり。御警固の武士を召して、山の名を御尋ねあるに、是は伯耆の大山と申す山にて候と申しければ、暫く御輿を停められ、内證深心の法施を奉らせ給ふ。或時は鷄唱に茅店の月を抹過し、或時は馬蹄に板橋の霜を踏破して行路に日を窮めければ、都を御出あつて、十三日と申すに、出雲の三尾の湊に着かせ給ふ。こゝにて御船を巖して、渡海の順風をぞ待ち給ひける。

其の頃備前國に、兒島備後三郎高德といふ者あり。主上笠置に御座ありし時、味方に參じて義兵を擧げしが、事未だ成らざる先に笠置も落され、楠木も自害したりと聞えしかば、力を失つても



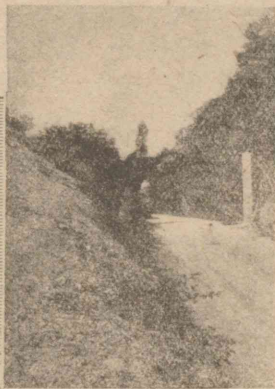
志士仁人

孔子の語  
論語にある  
衛懿公が

衛懿公之時、有<sub>リ</sub>臣曰<sub>ク</sub>弘演者、<sub>ハ</sub>受<sub>テ</sub>命<sub>ヲ</sub>而使<sub>ス</sub>。未<sub>レ</sub>反<sub>シ</sub>而狄人攻<sub>ム</sub>衛。懿公於焚<sub>ニ</sub>澤<sub>ニ</sub>殺<sub>レ</sub>之、盡<sub>シ</sub>食<sub>ス</sub>其肉<sub>ヲ</sub>、獨<sub>リ</sub>舍<sub>テ</sub>其肝<sub>ヲ</sub>。弘演至<sub>リ</sub>報<sub>シ</sub>使<sub>テ</sub>於<sub>レ</sub>肝<sub>ニ</sub>、辭<sub>シ</sub>畢<sub>テ</sub>呼<sub>ビ</sub>天<sub>ヲ</sub>而號<sub>シ</sub>。哀<sub>シ</sub>止<sub>シ</sub>曰<sub>ク</sub>若<sub>シ</sub>臣者<sub>ハ</sub>獨<sub>リ</sub>死<sub>シ</sub>可<sub>シ</sub>耳<sub>ヲ</sub>。於是<sub>ニ</sub>遂<sub>ニ</sub>自<sub>ラ</sub>刎<sub>リ</sub>出<sub>ス</sub>腹<sub>ヲ</sub>實<sub>シ</sub>、内<sub>シ</sub>懿公之肝<sub>ヲ</sub>、乃<sub>チ</sub>死<sub>ス</sub>。桓公聞<sub>キ</sub>之、復<sub>シ</sub>立<sub>テ</sub>衛<sub>ヲ</sub>於<sub>レ</sub>楚丘<sub>ニ</sub>。

見<sub>レ</sub>義不<sub>レ</sub>爲<sub>ス</sub>  
孔子の語  
論語にある

だしけるが、主上隱岐國へ遷されさせ給ふと聞きて、貳心なき一族どもを集めて評定しけるは、「志士仁人無<sub>ク</sub>求<sub>ル</sub>生<sub>ス</sub>以<sub>テ</sub>害<sub>ス</sub>仁<sub>ヲ</sub>、有<sub>リ</sub>殺<sub>シ</sub>身<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>成<sub>ス</sub>仁<sub>ヲ</sub>。」といへり。されば昔衛の懿公が、北狄の爲に殺されてありしを見て、其の臣に弘演といひし者これを見るに忍びず、自ら腹を搔切つて懿公が肝を己が胸の中に收めて、君の恩を死後に報いて失せたりき。見<sub>レ</sub>義不<sub>レ</sub>爲<sub>ス</sub>無<sub>ク</sub>勇<sub>也</sub>。」いざや臨幸の路次に參り會ひ、君を奪ひ取り奉



船坂山舊蹟と御遷幸地圖

船坂山

岡山縣備前國和氣郡三石村と兵庫縣播磨國赤穂郡船坂村との境にある山  
三石峠ともいふ

今宿

兵庫縣播磨國飾磨郡高岡町姫路市の西方  
三石  
岡山縣備前國和氣郡三石村

つて大軍を起し、縦令屍を戰場に曝すとも、名を子孫に傳へんと申しければ、心ある一族ども皆此の議に同ず。「さらば路次の難所に相待つて其の隙を窺ふべし」とて、備前と播磨との境なる船坂山の嶺に隠れ伏し、今や〜とぞ待ちたりける。臨幸餘りに遅かりければ、人を走らかしてこれを見るに、警固の武士山陽道を経ず、播磨の今宿より山陰道にかゝり遷幸を成し奉りける間、高德が支度相違してけり。「さらば美作の杉坂こそ究竟の深山なれ。こゝにて待ち奉らん」とて、三石の山より直違に、道もなき山の雲を凌ぎて杉坂へ着きたりければ、主上はや院庄へ入らせ給ひぬ」と申しける間、力無く、これよりちり〜になりけるが、せめても此の所存を上聞に達せばやと思ひける間、微服潜行して時分を窺ひけれども、然るべき隙もなかりければ、君



の御座ある御宿の庭に大きな櫻の木ありけるを押削つて、大文字に一句の詩をぞ書きつけたりける。

天莫空勾踐、時非無范蠡。



徳高郎三後備島兒  
(筆濯永林小)

勾踐 支那の周代の越の王 吳王夫差と戦つて會稽山に敗る 勾踐范蠡と謀り 隱忍持久多年兵を練り民を治め 遂に吳と戦つて之を滅す

御警固の武士ども朝にこれを見つけて、何事を如何なる者が書きたるやらんとて、読みかねて即ち上聞に達してけり。主上は聽て詩の心を御悟りあつて、龍顔殊に御快く笑ませ給へども、武

都を御出 元弘二年(一九一三) 三月七日 國府島 國府のある島の意か 隠岐の島後なる國分寺を行在所とせられたか

士は敢へて其の來歴を知らず、思ひ咎むることも無かりけり。さる程に主上は出雲の三尾湊に十餘日御逗留あつて、順風になりければ、船人纜を解いて御艤して、兵船三百餘艘前後左右に漕ぎならべて萬里の雲に溯る。時に滄海沈々として日西北の浪に没し、雲山迢々として月東南の天に出づれば、漁船の歸る程見えて、一燈柳岸に幽かなり。暮るれば蘆岸の煙に船を繋ぎ、明くれば松江の風に帆を揚げ、浪路に日數を重ねれば、都を御出あつて後二十六日と申すに御船隠岐國に着きにけり。佐々木隱岐判官清高國府島といふ處に黒木の御所を作つて皇居とす。玉辰に咫尺して召仕はれける人としては、六條少將忠顯頭大夫行房、女房には三位殿の御局ばかりなり。昔の玉樓金殿に引替へて、憂き節茂き竹椽、涙隙なき松の墻、一夜を隔つる程も堪忍ぶべ



鶏人曉を唱へし聲

鶏人曉唱。聲カス。驚明王之眠。

(朗詠集、都良香)

萩の戸  
清涼殿に在る御室の名

長谷部信連

以仁王の忠臣

左衛門尉

建長六年(九二四)

卒

贈從五位

宮

高倉宮以仁王

五月

高倉天皇の治承四年(八四〇)

き御心地ならず。鶏人曉を唱へし聲、警固の武士の番を催す聲ばかり御枕の上に近ければ、夜の大殿に入らせ給ひても露微睡ませ給はず。萩の戸の明くるを待ちし朝政なけれども、曉毎の御勤、北辰の御拜も怠らず。今年いかなる年なれば、百官罪なくして愁の涙を配所の月に濺ぎ、一人位を易へて宸襟を他郷の風に惱まし給ふらん。天地開闢よりこの方かゝる不思議を聞かず。されば天に懸る日月も誰が爲に明らかなることを恥ぢざらん。心なき草木も之を悲しみ、花さくことを忘れつべし。

(太平記)

五 長谷部信連

さる程に、宮は五月十五夜の雲間の月を眺めさせたまひて、何の

三位入道

從三位入道源賴

政

御所

三條高倉宮

三井寺

園城寺の別稱

近江國(滋賀縣)

大津市にある名

刹

天台宗寺門派の

大本山

市女笠



市女笠

行方も思し召し寄らざりけるに、三位入道の使者とて文持ちて忙しげに出で来る。宮の御乳母子六條、佐大夫宗信これを取つて御前に参り、開いて見るに、君の御謀、叛既に顯れさせたまひて、土佐の幡多へ移しまるすべしとて、官人どもが別當宣を承つて、御迎に参り候。急ぎ御所を出でさせたまひて三井寺へ入らせおはしませ。入道もやがて参り候はんとぞ書かれたる。宮はこの事如何せんと思し召し煩はせたまふ處に、宮の侍に長兵衛、尉長谷部信連といふものあり、折節御前近う候ひけるが、進み出でて申しけるは、たゞ何のやうも候まじ。女房の装束にいでたゝせたまひて、落ちさせたまふべうもや候らんと申しければ、この儀尤も然るべし。とて御髪を亂り、重ねたる御衣に市女笠をぞ召されける。六條、佐大夫宗信傘持ちて御供仕る。鶴丸と

昔、女官のあはれ、帽子

折の折、頭をかす



いふ童袋に物入れて戴きたり。たとへば青侍が女を迎へて行くやうにいでたゝせたまひて、高倉を北へ落ちさせたまふに、大きな溝の有りけるを、いと物輕う越えさせたまへば、道行く人が立止つて、はしたなの女房の溝の越えやうやとて、怪しげに見まゐらせければ、いと足早にぞ過ぎさせおはします。

御所の御留守には、長兵衛尉長谷部信連をぞ置かれける。女房たちの少々おはしけるをば、彼處此處へ立忍ばせて、見苦しきものあらば取りしたゝめんとて見る程に、さしも宮の御祕藏ありける小枝と聞えし御笛を常の御所の御枕に取忘れさせたまひたるをぞ、立歸つても取らまほしうや思し召されけん。信連これを見つけて、あなあさまし。さしも君の御祕藏の御笛を、と申して、今五町がうちにて追つついて参らせたり。宮斜ならず御



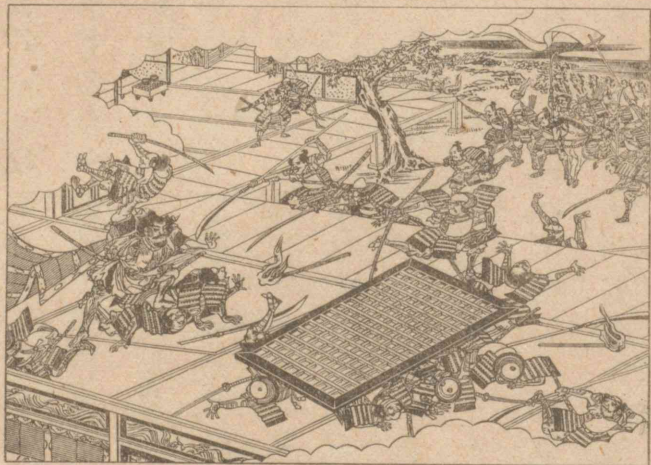
感ありて、我死なば、この笛をば御棺に入れよ。とぞ仰せける。やがて御供仕れ。と仰せければ、信連申しけるは、只今あの御所へ、官人どもが御迎に参り候なるに、人一人も候はざらんは、むげに口惜しく存じ候。その上あの御所に信連が候と申すことをば、上下皆知つたる事でこそ候へ。今夜候はざらんは、それもその夜は逃げたりなどいはいはれんこと口惜しう候べし。弓箭執る身は、かりにも名こそ惜しう候へ。官人どもに暫くあひしらひ、一方打破つて、やがて参り候はんとて、只一人取つて返す。信連がその夜の装束には、薄青の狩衣の下に萌黄の腹巻を着て、衛府の太刀をぞ帯いたりける。三條表の總門をも、高倉表の小門をも共に開いて待ちかけたり。案の如く源大夫、判官兼綱出羽、判官光長、都合その勢三百餘騎、十五日の子の刻に宮の御所



へぞ押寄せたる。源大夫判官は存ずる旨ありと覺えて、遙かの門外に控へたり。

出羽判官光長は乗りながら門の内に打入れ、庭に控へ、大音聲を揚げて、宮の御謀叛既に顯れさせたまひて、土佐の幡多へ遷し參らせんが爲に、官人どもが別當宣を承つて、只今御迎に參つて候。疾うく御出候へ。と申しければ、信連大床に立つて、當時は御所でも候はず、御物詣で候ぞ。何事ぞ、事の子細を申されよ。といひければ、出羽判官、なんでふ、この御所ならでは、何處へか渡らせたまふべかんなるぞ。その儀ならば、下部ども參つて搜し奉れ。とぞ申しける。信連重ねて、物も覺えぬ官人どもが申しやうかな。馬に乗りながら門の内へ參るだにも奇怪なるに、剩へ下部ども參つて搜し奉れ。とはいかでか申すぞ。長兵衛尉長谷部信連が

候ぞ。近く寄つて過ちすな。とぞいひける。廳の下部の内に金



長谷部信連の齋關 (源平盛衰記圖會)

武といふ大力の剛の者、打物の鞆を外し、信連に目を懸けて、大床の上へ飛登る。これを見て同隸ども十四五人ぞ續いたる。信連これを見て、狩衣の帶紐引切つて捨つるまゝに、衛府の太刀なれども身をば心得て作らせたるを抜合はせて、散々にこそ振舞うたれ。敵は大太刀大長刀で振舞へども、信連が衛府の太刀に斬立てられて、嵐に木の葉の散るやうに、庭へさつとぞ



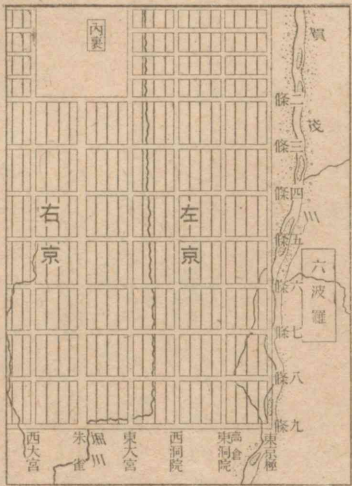
下りたりける。

五月十五夜の雲間の月のあらはれ出でて明かかりけるに、敵は無案内なり、信連は案内者にてありければ、あそこの面廊に追っかけては、はたと斬り、此處のつまりに追つつめては、ちようと斬る。「如何に宣旨の御使をばかうはするぞ」といひければ、宣旨とは何ぞ」とて、太刀ゆがめば躍りのき、押直し、踏直し、矢庭によき者ども十四五人ぞ斬伏せたる。

その後、太刀の鋒三寸ばかり打折れて捨ててげり。腹を切らんと腰を捜せども、鞘巻落ちて無かりければ、力及ばず、大手をひろげて高倉表の小門より跳り出でんとする所に、大長刀持ちたる男一人寄りあつたり。信連長刀に乗らんと飛んでかゝるが、乗損じて股を縫ひざまに貫かれ、心は猛く思へども、大勢の中に取

籠められて、生捕にこそせられけれ。その後、御所中に亂れ入つて捜せども、宮は渡らせたまはず。信連ばかり搦めて六波羅へ率てまゐる。

宗盛卿  
右近衛大將平宗盛  
清盛の次子  
重盛の弟



近附羅波六都京

前右大將宗盛卿、大床に立つて信連を大庭に引きすゑさせ、誠に「わ男は、宣旨の御使と名のるを、宣旨とは何ぞ」とて斬つたりけるか。その上、廳の下部ども多く刃傷殺害したんなれば、能くよく糺問して事の子細を尋ね問ひ、その後、河原に引出して首を刎ねよ」とぞのたまひける。信連もとより勝れたる大剛の者なりければ、居直りあざ笑つて申しけるは、この程あの御所を夜



な夜なものこゝろの窺ひ候を、なんでふ事かあるべきと思ひ侮つて用心も仕らぬ處に、夜半ばかりに鑑うたる者どもが二三百騎打入つて候を、何者ぞ。と尋ねて候へば、宣旨の御使と申す。當時は諸國の竊盜強盜山賊海賊など申す奴ばらが、或は公達の入らせたまひたるぞ。或は宣旨の御使など名のり申すとかねく承つて候ほどに、宣旨とは何ぞ。とて斬つたる候。凡そ信連物の具をも思ふやうに仕り、鐵良き太刀をも持つて候はんには、只今の官人どもをばよも一人も安穩にては還し候はじ。その上、宮の御在所は何處に渡らせ給ひ候やらん、知り參らせぬ候。假令知り參らせて候とも、侍ほどの者の一度申さじと思ひ切りてんことを、糺問に及んで申すべき様なし。とて、その後は物も申さず。幾らも並みゐたりける平家の侍ども、あつばれ剛の者や。これ

所  
院の御所

入道相國  
太政大臣平清盛  
入道して淨海と

日野  
伯耆國(鳥取縣)

鎌倉殿  
日野郡日野郷

源賴朝

高神覺昇  
宗教家

智山大學教授  
明治二十七年(三  
聖)三重縣生

らをこそ一人當千の兵ともいふべけれ。と口々に申しければ、その中に或人の申しけるは、あれが高名は今に始めぬことぞかし。先年、所いふにありし時、大番衆の者どもの止めかねたりし強盜六人に只一人追つかゝり、二條堀川なる處にて四人斬伏せ、二人生捕つて、その時なされたりし左兵衛尉ぞかし。あつたら男の斬られんずることの無慚さよ。と惜しみあへりければ、入道相國いかが思はれけん、さらば、な斬つそ。とて、伯耆の日野へぞ流されける。平家亡び源氏の世になつて、東國へ下り、梶原平三景時について、事の根元一々に申したりければ、鎌倉殿神妙なりと感じたまひて、能登の國に御恩蒙りけりとぞ聞えし。(平家物語)

六 永恆の瞬間

時間の内題  
は内

高神覺昇



ライブニッツ  
ドイツ哲學の祖  
十七世紀の人

ヘラクライトス  
古代希臘の哲學  
者  
(西曆前五五頃一  
四五頃)

時間といふものを考へる場合、私たちは常に過去とか、現在とか、  
未來とかいつた風に、一々それを切離して考へる。そしてその  
間にはなんら關係がないものの如くに。

試に今現在を基調として考へれば、現在は過去とも、未來とも手  
を繋いでゐる現在である。ライブニッツのいはゆる「過去を背  
負へる現在であり、未來を孕める現在である。」過去をいへば無  
限の過去、未來をいへば久遠の未來、それを背負ひ且孕めるもの  
が、とりも直さずこの現在である、この意味において、少くとも現  
在は過去に對してはその結果であり、未來に對してはその原因  
である。即ち現在は無限の過去の到着點であり、久遠の未來へ  
の出發點であるわけである。  
すべての物はずつとつりまわつてゐる。  
けだしヘラクライトスを待つまでもなく、萬物流轉といふこと

は、永久に眞理である。諸行はまさしく無常である。我も人も、  
人も物も、つねに生滅し變化して暫くも休むことはない。  
従つて凡ては私どもにとつては一期一會である。一生一度、そ  
れが私どもの人生である。



パ ス カ ル

思ふに私たちがもつ今日、そ  
れは永遠に歸り來らざる今  
日である。いはゆる永遠の  
今日であり、永恆の瞬間であ  
る。故に私たちにとつて最  
も大切なことは、「今」を生かす  
ことである。永遠なる今日に目覺めることである。それが少  
くともほんたうに人生を哲學した人の態度であらねばならぬ。



芭蕉

松尾氏  
名は宗房  
俳聖  
伊賀國(三重縣)  
上野の人  
文祿七年(三酉)  
歿  
年五十一

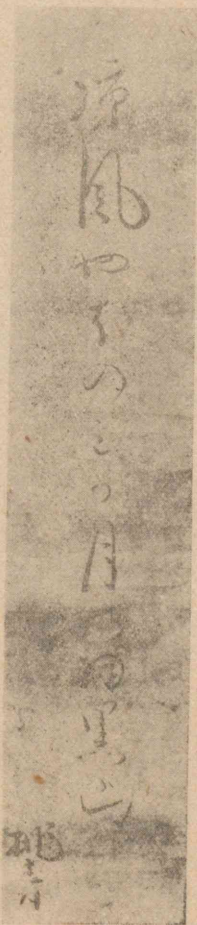
筆蹟

涼風やほの三日  
月の羽黒山  
桃青

明日あり

明日ありとおも  
ふ心の仇櫻よは  
に嵐の吹かぬも  
のかは(親鸞聖  
人の歌といふ)  
來年は  
尾張露川の句

芭蕉が終焉に臨んでいつた言葉はまことに味はふべきである。  
昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世、生涯いひ捨  
てし句は、悉くみな辭世である。といふ、この芭蕉の心境こそ、眞に  
今日を擱んだ人であり、ほんたうに人生を凝視した人である。



芭蕉筆

おもふに、とかく私たちは「明日あり」といふその心持にひかされ  
て空しく一日を過すことがある。「來年は來年はとて暮れにけ  
り」とは、あながち一俳人のみの感慨ではない。げに私たちのも  
つその一日こそ、永遠に戻り來らざる一日である。永遠の一日

である。

生涯いひ捨てし句はみな辭世の句だ、といふその態度こそ、眞に  
人生に徹した人の態度である。

古來「眞理は平凡なり」といはれてゐる。まことに眞理は平凡で  
ある。宏遠なる宗教生活なるものも、つまりはこの「永遠なる一  
日」をよりよく生かすことであり。永恆の瞬間に目覺めること  
である。いはゆる永遠に立脚して刹那に努力するものこそ、ほ  
んたうに宗教の眞諦を擱んだ人であると同時に、それはまた正  
しく人生を深く味はつた人である。(眞理を歩む)

七 夜叉王

岡本綺堂

元久元年七月十八日。

岡本綺堂  
名は敬二  
戯曲家  
帝國藝術院會員  
東京生  
昭和十四年歿  
年六十八



登場人物

面教師夜叉王  
 夜叉王の娘桂  
 同 楓  
 源左金吾頼家  
 從者下田五郎景  
 安  
 修禪寺の僧  
 元久元年七月  
 十八日  
 土御門天皇の御  
 世(八六四)  
 この日頼家は北  
 條時政の手で獄  
 せられた  
 年二十三  
 修善寺村  
 今の静岡縣田方  
 郡修善寺村  
 建仁三年(一一六二)  
 八月源頼家母政  
 子の爲にこゝに  
 幽せられた

伊豆の國狩野の莊修善寺村、桂川の畔、夜叉王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正  
 面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素焼の土瓶など  
 掛けたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其の  
 後は畠を隔てて、塔の峯つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間の家體は細工場にて、三方に古りたる  
 蒲簾を下せり。庭前には秋草の花咲きたり。

楓門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持  
 ちて先に立ち、續いて源頼家卿(二十三歳)跡より下田五郎景安(十  
 七八歳)頼家の太刀を捧げて出づ。

僧  
 ぞ。これ、將軍家の御微行ぢや、疎相があつてはなりません

楓はつと平伏す。頼家主從進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉  
 思ひも寄らぬお成とて、何の設もござりませぬが、先づあれ  
 へお通り下されませ。

頼家は縁に腰を掛く。

夜叉  
 して、御用の趣は。

頼家  
 問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に  
 遣さんと、曩に其の方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪  
 姿までも遣はして置いたるに、日を経れども出來せず。幾度  
 か延引を申立てて今まで打過ぎしは何たる事ぢや。

五郎  
 たかが面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも百日とは費  
 すまい。お細工仰せつけられしは當春の初め、其の後已に半  
 年をも過ぎたるに、未だ献上いたさぬとは餘りの懈怠、最早猶  
 豫は相成らぬと、上様の御機嫌散々ぢやぞ。



頼家 予は生まれ附いての性急ぢや。何時まで待てど暮らせど埒明かず。餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠り居るか。子細をいへ、子細を申せ。

夜叉 御立腹恐入りましたてござりまする。勿體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程のもの一箇もなく、更に打替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

頼家 え、催促の都度に同じ事を。其の申譯は聞飽いたぞ。  
五郎 此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までに

は必ず出來するか、豫め期日を定めてお諾を申せ。

夜叉 其の期日は申上げられませぬ。左に鑿を持ち、右に槌を持てば、面は容易く成るものと思し召すか。家を作り塔を組む番匠などとは事變りて、これは生無き粗木を削り、男女、天人、夜叉羅刹ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打込む面作師。

五體に漲る精力が兩の腕に自ら湊る時、我が魂魄は流るゝ如く、彼に通ひて始めて面も作られます。但し其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、我ながら確とはわかりませぬ。

僧 これ、夜叉王殿。上様は御自身も仰せらるゝ如く至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止の無い事申上げたら御疳癖が愈、募らう

夜叉

梵語

捷疾鬼と譯す

羅刹

梵語

惡鬼と譯す

三島神社

静岡縣伊豆國三

島市にある

官幣大社

修善寺から北二

十軒



程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからう。

夜叉 ぢやというて出来ぬものはのう。

僧 何の、こなたの腕で出来ぬ事があらう。面作師も多くある

中で、伊豆の夜叉王といへば、京鎌倉までも聞えた者ぢやに：

夜叉 さあ、それ故に出来ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王

といへば、人にも少しは知られた者、たとひお咎め受けうとも、

己が心に染まぬ細工を世に遺すのは、如何にも無念ぢや。

頼家 何、無念ぢやと……。さらば如何なる祟を受けうとも、早急

には出来ぬといふか。

夜叉 恐れながら早急には……

頼家 んう、おのれ覺悟せい。

疍癖募れる頼家は、五郎の捧げたる太刀を引取つて、あはや抜かんとす。奥より桂走り出で、

桂 まあ〜、お待ち下さりませ。

頼家 え、退け〜。

桂 先づお鎮まり下さりませ。面は唯今献上いたしまする。

のう父様。

と願みれども、夜叉王は黙して答へず。

五郎 何、面は既に出来して居るか。

頼家 え、おのれ、前後不揃の事を申立てて予を欺かうでな。

桂 いえ〜、嘘いつはりではござりませぬ。面は確に出来し

て居りまする。これ父様、もう此の上は是非がござんすまい。

楓 ほんにさうぢや。昨夜漸く出来したといふ彼の面を、いつ



そ献上なされては……

僧　それがよい、く。　こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出来した面があるならば、早う上様に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉　命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知つた事でない。黙つておゐやれ。

僧　さりとして、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面を持つて来て、ともかくも御覽に入れたがよいぞ。早う、く。

楓　あい、く。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂受取りて頼家の前に捧ぐ。頼家無言にて心少しく解けたる體なり。

桂　偽ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲を揚げる。

頼家　お、見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎　上様おん顔に生寫しぢや。

頼家　んう。

と飽かず打ちまもる。

僧　さればこそいはぬ事か。これ程の物が出来してゐながら、とかう濫つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。は、く、く。

夜叉王容を改める。

夜叉　何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じました、かう相成つては致方もござりませぬ。方々には其の面



を何と御覽なされます。

頼家 さすがは夜叉王、あつぱれのものぢや。頼家も満足したぞ。

夜叉 あつぱれとの御賞美は憚へんかながらおめがねちがひ。それは

夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎 面が死んで居るとは……

夜叉 年來數多打つたる面は生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、此の度の面に限つて、幾度打直しても生きたる色無く、魂も無き死人の相……それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎 そちはさやうに申しても、我等の眼にはやはり生きたる人の面…… 死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉 いや、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。而

も眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き怨靈オンレイ、怪異クワイなどの類……

僧 あ、これ、其のやうな不吉な事は申さぬものぢや。御意

に適へば、それで重疊。有難くお禮を申されい。

頼家 んう、とにかくにも、此の面は頼家の意に適うた。持歸る

ぞ。

夜叉 たつて御所望とござりますれば……

頼家 お、所望ぢや。それ。

願にて示せば、桂は心得て假面を箱に納め、頼家に捧ぐ。頼家立つ、五郎も立つ。桂庭にあり立つ。

僧 やれ、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王殿、明日又逢ひませうぞ。



クライマックス

頼家 頼家行きかゝりて物に躓く。  
おく、何時の間にか暗うなつた。

僧は進み出でて桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱を僧に渡し、燈籠を持ちて出づ。夜叉王はじつと思案の體なり。

楓 父様、お見送を……

夜叉王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎 そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。

頼家等相前後して出行く。夜叉王起ち上つて暫時黙然としてゐたりしが、やがてつか／＼と縁に上り、細工場より槌を持來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。

楓は驚きて取纏る。

楓 あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜叉 せつば詰りて是非に及ばず、拙き細工を献上したは悔んで



(劇) 王 叉 夜

も返らぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡つて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑を遺さば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り。再び槌は持つまいぞ。  
楓 さりとは短氣でござりませう。如何なる名人、上手でも細工の出來不出來は時の運。一生の中に一度でもあつぱれ



名作が出来ようならば、それが即ち名人ではござりませぬか。  
夜叉 んう。

楓 拙い細工を世に出したが、さ程無念と思し召さば、これから  
愈、精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥  
を雪いで下さりませ。

楓は縫りて泣く。夜叉王答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。  
日暮れて笛の音遠く聞ゆ。綺堂戯曲集

五十嵐力

國文學者  
文學博士  
早稻田大學教授  
明治七年(二三四)  
山形縣生

八新 綠

五十嵐 力

自然を見る眼が暗いのであらう。私が新緑の美といふものを  
心から感ずるやうになつたのは、自分で草木を手がけるやうに  
なつてからである。冬の中に寒肥などをやつて、花を待ち若芽

を待つもどかしい一日々々が夢のやうに過ぎて、やがて紅い白  
い色々の花が咲く。そしてそれが散ると、今まで堅く結んでゐ  
た芽が段々にほごれて来て、米粒大豆粒位の小さな鱗片状のつ  
ぎはぎの裡から、三寸五寸一尺二尺といふみづ／＼しい若枝が  
伸びだす、數枚數十枚の透きとほるやうな若葉が開けて来る、木  
によつては尺にも餘る直径の、化けさうな巨大な葉が、丁度手品  
師が小さい空箱から大きい雨傘を幾つも出すやうに、幾枚とも  
なく現れ出でて人を驚かす。

およそ植物の一年間の生活の中で、新緑の時分ほど、驚異を現す  
ことはあるまい。而してその驚異が、一々吾等が平生の手當や  
心遣に反應して来る所を見ると、一枚の葉の開ける所にも、一寸  
の枝の伸びる所にも、限りなき喜が湧いて来る。彼等のみづみ



づしい生長を見るのは、やがて頑是ない子供の福々しく太るのを見る心である。彼等の新しく成長する姿を見ながら、無駄枝・馬鹿枝を剪み切るのは、子供の身體から疣・瘤・腫物を除き去つてやる心である。柔かな枝の匂を妨げる古葉や枯枝を拂つてやるのは、子供の身體から髪を刈り、爪を切り、垢を洗つてやる心である。而して彼等が舊塵をすつかり洗ひ落し、自然の風姿をほしいまゝにして、吾等を招くやうに枝を伸ばし、葉を伸ばすところを眺め、晩春の柔かい日光が透きとほるやうな薄緑の葉に濾されて、春温の煙るやうな木の下陰をそゞろあるきする心の喜は、實に何ともいふことが出来ぬ。

花といへば紅い色を思はせるやうに、緑といへばすぐに青い色

を思はせる。けれども「新緑」といふのは、無論新しい木の葉のあらゆる色を含めていふので、緑や青に限らない。「緑の錦」とは、この若葉の無数の色を一番力のある緑に統べさせた名前である。

新緑は紅・白・黄・紫など、花のもつて居る無数の色を殆ど悉く備へて居る外に、如何なる花ももつて居らぬ一つの色をもつて居る。それは「緑」である、青い色である。西洋では「青い花」といふ詞が、世の中に無いものといふ意味に使はれて居るが、緑の色は、實に葉のみの有する特權である。「緑」は、造化が花に禁じて葉にのみ許した貴い色である。花に取つては禁色であり、葉に取つてはゆるしの色である。あらゆる色を許されて緑のみを許されなかつた花は、いかなる羨みの眼を以て葉を眺めて來たであらう。







71

かせて、渡月橋の上十町を装つた景色がどんなだらうと思ふと、  
そゞろに胸の躍るのを覚えて来る。  
新緑は私に取つて、實に花にも勝る喜である。野山の大きな景  
色は言ふに及ばず、猫の額のやうな小さい庭の新緑でも、尙わが  
小さい心に盛切れぬ喜と感謝とを湛へてくれる。(我執轉々記)

8月25日 第二學期 斑鳩の宮

九 斑鳩の宮

三木露風

三木露風  
名は操  
詩人  
明治二十二年(三  
西)兵庫縣龍野  
町生  
斑鳩の宮  
法隆寺東院なる  
夢殿  
上宮王  
聖徳太子

やまとの國  
上宮王の  
いまし 斑鳩の宮。  
青葉して、  
夏は今盛なり。

古きこの  
あとどころ、  
我は立ち、  
昔しのべば、  
白き日のかぎろひ  
照れる中に  
幻青し。

まだ稚き若草の文明日本に  
吹きめぐる西域の薫は、  
やはらかき詩の佛陀を



(筆彦靱田安) 子太徳聖の殿夢



金色にたゞよはせぬ。

日出處の天子

日没處の

天子に

書を致す。

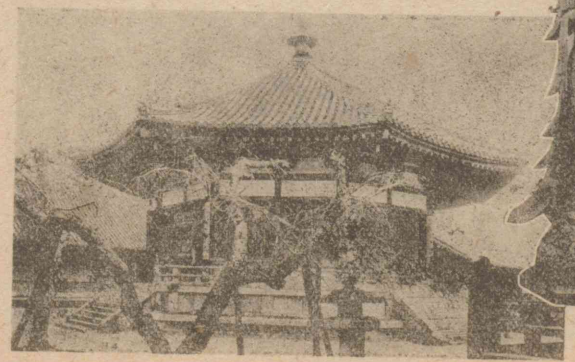
と

かの太子

は宣らす、

おごそかに國使をして、

覺芻や慧慈等の聖徒は



殿夢と音親殿夢

(十七條)

覺芻 高麗の僧  
慧慈 高麗の僧  
推古天皇三年  
(二五)來朝  
二人共に聖徳太  
子の師

衣を翻して來り、

藝術興り、文明進み、

憲法制定せられて、朝政革る。

承詔必謹

美しき法隆寺は

千三百餘年の昔に建ちけらし。

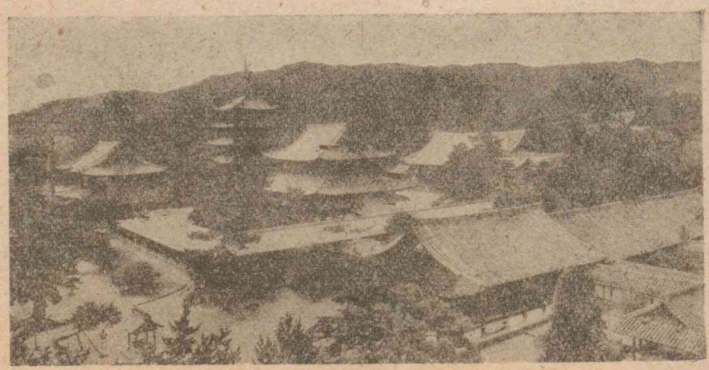
嗚呼、大いなる日本のこゝろを示す

僧伽藍摩。

見つ、我が

涙をながす、

東天の菩薩太子、





君がせし功績のあとを。

やまとの國

上宮王の

いましし斑鳩の宮、

青葉して、

夏はいま盛なり。 (青き樹かげ)

法隆寺

奈良七大寺の一

推古天皇十五年

聖德太子御建立

高濱虚子

名は清

俳人

小説家

帝國藝術院會員

明治七年(三五四)

伊豫國(愛媛縣)

松山生

一〇 法隆寺

高濱虚子

法隆寺の金堂にはいつた。明かるい處から急に暗い處にはいつたので、初の間は何も見えぬ。漸くにして印度佛の後が見えて來る。眞四角な天蓋が見えて來る。だんくと様々な佛體

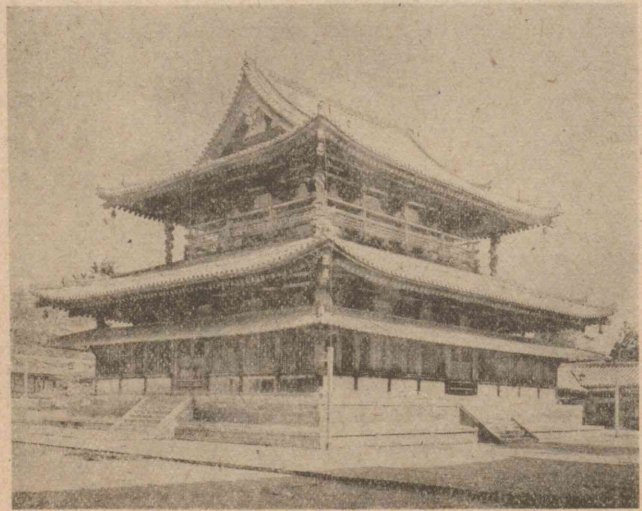


觀音菩薩 阿彌陀如來 勢至菩薩 法隆寺金堂壁畫



壁畫  
筆者は未詳  
鞍作部鳥ともい  
ひ又は高麗の僧  
曇徴ともいふ

が見えて来る。案内者は壁の方を向いて、此の壁畫は朝鮮の僧  
何某が聖徳太子の命を受け  
て描いたものだといふ。た  
だ眞黒な壁と思つてゐたが、  
成程壁畫がある筈だなど眸  
を据ゑて暗の中を見ると、暫く  
して纔かにそれらしいもの  
が眼に入る。よく見て居る  
と、頭らしいもの、顔らしいも  
の、手らしいものなどがだん  
だん見えて来る。人間より  
も稍大きい位に描かれて居る佛様が澤山あるのであつた。案



法隆寺金堂



内者は、此の彩色のうちの丹ニいのは珊瑚末コサンノマだといふ。彩色があ



法隆寺金堂の壁畫

た畫だ。剥ハカげて居る、燻スつて居る、輪郭リンカクさへ明らかで無い。それ

るのかと更に凝視すると、成程彩色がある。纔ヒラかに碧アヲい色が見える、丹ニい色が見える。其處ばかりをじつと見て居ると、乏しい光線も自らこれのみに集つて來るかと思ふやうにだん／＼其處が明るくなつて來て、その丹碧ニヒの色は浮出るやうに眼に入る。固より千年以上の歳月を経

に拘らず、その丹碧の色は鮮かに眼に入る。千年の古色を呈して尙その中に鮮明な光を湛へて居る。余は生を此の世に享けて以來、未だかゝる重みのある、そして鮮明な色を見たことが無い。その筈だ、珊瑚を粉にした珊瑚末が壁土同様惜しげも無く磨りこんであるのだもの。神像を置る所の箱余はそれから玉蟲の厨子ツシも見た。印度佛も正面に廻つて見た。天蓋も凝視した。一として名高くないものは無い。佛體も一見た。何れにも恍惚として眼をつぶつたが、しかし此の丹碧の色ほど強く心を刺戟シツキしたものは無かつた。

それから金堂を出て夢殿の廊下を通つて居る時、りん／＼と物が鳴つた。案内者があの鈴は金鈴といつて、黄金を澤山入れて拵ツクリへた鈴ださうです。といつた。その音の好きといつたら



迦陵頻伽

妙音鳥  
如來の音聲以外  
には天人の音聲  
も及ばぬ好い聲  
の鳥といふ

經文にあはれは  
死體の身で極  
美をばけり面  
てぬといふ

喩へようにも物が無い。此の法隆寺にあるどの佛體を叩いて  
もあんな好い音は出まい。極樂淨土で啼くといふ迦陵頻伽の  
聲も恐らくかうまではあるまいと思つた。それから廊下を傳  
つて寶藏の方へ行きかけると、又りんく〜と鳴つた。あゝたま  
らない好い音だと立止つて耳を澄ました。此の時ふと、今案内  
者は鈴だといつたが、もし彼の金堂の壁畫の色が音を出したの  
ではあるまいかと疑つた。

蘭の香も法隆寺には今めかし (俳諧一口噺)

與謝蕪村  
本姓は谷口氏  
夜半亭と號す  
俳人

畫家  
攝津國生  
天明三年(一四四三)  
歿  
年六十八か

二 牡丹

春の海ひねもすのたりのたりかな 與謝蕪村  
牡丹散つてうちかさなりぬ二三片

大島蓼太  
信濃の俳人  
天明七年(一四四七)  
歿  
年七十

炭太祇  
俳人

京都生  
明和八年(一四三三)  
歿

年六十三

黒柳召波

號は春泥舎  
俳人

京都生

蕪村の門人

朝日寺

京都北野神社附

屬の寺

室町殿

足利三代將軍義

滿の「花の御所」  
をいふ

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな  
蕭條として石に日の入る枯野かな  
若葉して水白く麥黄ばみたり

五月雨やある夜ひそかに松の月 大島蓼太  
世の中は三日見ぬ間の櫻かな

山路来て向かふ城下や風の數 炭太祇  
犬にうつ石のさてなし冬の月

鶯や藪をへだてて朝日寺 黒柳召波  
水仙や室町殿の五間床



高井几董  
京都生  
寛政元年(二四九)  
歿  
年四十九

千代女  
女流俳人  
加賀國(石川縣)  
松任生  
安永四年(四三五)  
歿  
年七十四

高桑闌更  
加賀國(石川縣)  
金澤生  
寛政十年(四五六)  
歿  
年七十三  
小林一茶  
信濃國(長野縣)  
柏原生  
文政十年(四六七)  
歿  
年六十五

繪草紙に鎮おく店や春の風 高井几董  
山寺や縁の下なる 苔清水

朝顔につるべとられて貫ひ水 千代女  
蜻蛉つり今日はどこまでいつたやら

川舟や雲雀啼き立つ 右左 高桑闌更  
枯蘆の日に 折れて流れけり

蟻の道雲の峯よりつゞきけん 小林一茶  
けふもく絲引きずつて蜻蛉かな

藤田東湖

名は彪  
勤王家  
水戸藩士  
安政二年(二五二)  
卒  
年五十  
贈正四位

慎中  
弘化四年(二五七)  
から嘉永五年(二  
五三)まで水戸に  
謹慎を命ぜられ  
た

弘道館  
水戸藩の學校  
天保十三年(二五〇)  
三徳川齊昭これ  
を開く

三人の間に答ふ

藤田東湖

一兩年以來十數度の貴翰尙又時々御惠投ものに預り、殊に當  
春梅花の御贈もの等、實以て御厚意淺からず。僕が頑鈍狂愚、  
何故、右様御眷顧下され候や、謝する所を知らず、汗顔の至に御  
座候。  
さて慎中は貴答延引も當然に候處、當二月幽厄を脱し候上は、  
早速一書を裁し、右數度の御厚意を謝し候筈の處、爾來僕が境  
界、實以て寸暇もこれなく、尤も日々夕刻大白を傾け候暇はこ  
れあり候へども、其の外はとかく閑隙を得ず、今日始めて貴答  
に及び候。  
一、先年弘道館にて貴兄御面貌はたしかに相覚え候。謂はゆ



嶄然頭角

雖少年已自成  
人、能取進士  
第一、嶄然見頭  
角。

(唐の韓退之が  
柳子厚墓誌銘)

御國

水戸藩

る嶄然頭角、今以て心目に宛然に御座候處、追々御詩文等拜見、  
尙又御噂承知致候へば、近年益御研精の由、憚ながら感心仕候。  
老人くさき申分には候へども、御國も學校御開き以來、讀書家



藤田東湖

は悉く澤山に相成候へど  
も、眞實の學者は寥々に御  
座候間、國家のため御勵精  
尤に存候。僕などは罪名  
載せて幕府の籍にある身  
分にて天地の一棄人に候

間、理窟がましきことは一切申すまじと心がけ候へども、大義  
未だ曾て君臣を忘れざる至情もたし難く、且は度々の御細書  
御深意をも推察致し、旁心事ほゞ吐露仕候

弘道館記

水戸侯徳川齊昭  
が藩學弘道館を  
設けた由來を述  
べて水戸學の精  
神を明らかにし  
たもの

申す迄はこれなく候へども、學問は實學にこれなくては、却つ  
て無學にも劣り申候。弘道館記中に「忠孝無二、文武不岐、學問  
事業、不殊其效」と遊ばされ候儀、實に學者立志の模範、志士報國  
の根本に御座候はんか。今世、親孝行の様なれども、御奉公は  
出來ぬ風の人も相見え、又御奉公出來候様にても、父子の中と  
くと致さざる向も相見え候。これら決して聖人の道にあら  
ずと存候。又少々書を読み候へば、何か子細らしき顔色を致  
し、言語等漢文交りにてしやらくさく候へども、劔槍等の藝一  
切出來申さず、文弱白面の書生と相成候儀、毛唐人ならばそれ  
にて宜しきかも相知らず候へども、かりそめにも神州尙武の  
域に生れ、且は武家の飯を食ひ候者は、右様白面の書生は風上  
へも置きかね候事、勿論に御座候。武人の愚にも困り候へど



も、どちらと申候へば寧ろ文弱の書生にはまさり申すべきか。しかし成るべきだけは、文武岐れず兼備これありたき事、是亦勿論に御座候。

學問、事業その效を殊にせざるに至り候うては、なか／＼難物なり。僕が輩、頌白に相成候へども、今以て學問、事業一致の場合に相成申さず、及ばずながら心を用ひ居る事に候。修己治人の工夫、明倫正名の講究時々刻々離れ申さず候はば、貴兄などは妙齡の御事ゆゑ、必ず學問、事業の一致も御出來なされ候はん。随分御研精御尤に御座候。

一、讀書は博きを貴び候へども、うはすべり致し候うては、萬卷の書を読み候とても、用をなしかね候はんか。古人の謂はゆる、眼光紙背に透ると申すごとく讀みたき事に御座候。次第

次第に後の世に生まれ候ほど、讀書多く相成申候。古人は六史か七史讀み候へば相濟み候が、十七史又は二十一史と申す様に相成末が末に相成候はば、三十史も五十史も讀み申さず候うては相成らざる譯合故、博きを貴び候中にも、その要を得候儀肝要と存候。人の持前種々これあり候故、一概には申兼候へども、歴史等も唯ばつと讀み候よりは、何か一つ講究著述致す心得にて讀み候方、格別に益を得候様相覺え申候。制度の事も、文辭の事も、名君賢相の行狀其の外一々記憶致すべしと存候うては、大抵の人にては中々覺え兼申候。東坡が漢書を讀み候法など面白く御座候。尚又御勘考御尤に存候。一、文章は末藝に候へども、自己にて文を書き候位にこれなく候うては、經書も歴史も本當に解し申されず候間、随分御餘力

孟子 中庸 大學 八條目

致知 誠意 正心 齊家 治國 平天下

十七史 前漢書 後漢書 三國志 晉書 宋書 梁書 陳書 北齊書 周書 南史 北史 五代史 二十一史 宋史 遼史 金史 元史

東坡 某讀漢書至是凡三經三手鈔一矣。初則一段事鈔三字爲一題。次則兩字、今則一字。東坡外傳

孟子 中庸 大學 八條目



李太白長語  
七言古詩雅子美  
不失初唐氣格  
而縱橫有之。太  
白縱橫任々張弩  
之末間雜長語  
英雄欺人耳。  
(唐詩選序)

天地心大爭將世鍾 神妙秀為  
不二藏鏡、尊千秋泣の大瀛水  
洋、環洲發萬萬朵櫻象芳  
艷与佛漸為百鍊鐵銳利、刺整  
蓋臣皆能羅去夫盡好仇 神妙  
孰天治極左有 天皇、風洽の  
合 明徳伴去陽不世言、隆正  
氣時吐之乃參、大連議侃、排豐曇  
乃助 明主斷、焚伽藍中郎  
常用之、宗社盤石也、清丸常用  
、妖僧肝膽寒、勿揮龍口、劍虜使  
頭、是兮、勿起西州、颯然、藏妖  
氣志、賀日、明夜陽、為鳳、輦、巡、若  
野戰、耐日、又代、帝子、屯、或、枝、錄  
倉窟、履、核、心、慎、或、伴、櫻、井、驛  
遺、訓、何、隱、為、或、守、伏、見、城、一、身  
尚、萬、軍、或、狗、天、同、山、幽、囚、不、忘  
天、升、平、二、百、載、斯、等、等、仲、並、商

和 文 天 祥 正 氣 歌

には御修行御尤に存候。但し  
近來、長短句にてごまかし候詩  
流行致候處、唐詩選の序にも、李  
太白長語を用ひ候事を評して、  
「英雄人を欺くのみ」と申候。今  
の流行は凡庸人を欺くとも申  
すべく候。右の類は先々御稽  
古これなき方と存候。  
一、慶元以來、人物林の如く、豪傑  
も追々に出て候處、其の中にて、  
仁齋の學問、徂徠の文章、熊澤の  
經濟、新井の敏捷など、皆畏るべ

東夷の人  
日本國夷人物茂  
卿、拜手稽首敬  
題賀孔子真。  
(徂徠集)

司馬溫公

北宋の司馬光  
字は君實  
諡して溫公といふ

朱文公

南宋の朱熹  
字は元晦  
諡して文公といふ

韓魏公

北宋の韓琦  
字は稚圭  
魏國公に對せられた

其若屈生四十七人乃古人之難亡  
英靈未嘗泯長在天、故有、此、光、取  
暴倫、孰、能、扶、植、卓、立、康、傳、侯  
出、誠、尊、皇、室、孝、敬、事、天、神  
脩、文、兼、奮、武、誓、欲、清、湖、塵、一、朝  
天、步、形、和、天、身、先、論、頑、鏡、之、也、檢  
罪、庚、及、如、王、困、膏、蒿、天、寃  
向、誰、陳、孤、子、遠、埃、墓、何、以、報、先、親  
若、再、二、周、星、獨、有、斯、氣、隨、嗟、予  
難、弟、死、豈、忍、与、汝、終、屈、仲、付、天  
地、生、死、又、何、能、生、而、守、天、寃、後、已  
張、四、維、死、為、忠、義、鬼、極、天、護  
皇、基

(書 並 賦 湖 東 田 藤)

弘化して仲冬、竟于北極、著  
飾、神、小、松、村、尚、必  
崇、陸、陸、飛

く存候。併し右の内、徂徠は更  
に名分を存ぜず、自ら東夷の人  
と稱し候儀、不届至極に御座候。  
新井も才氣絶倫に候へども、東  
都を張立て候志は悪むべく候。  
さ候へば、今に在つては右數子  
の長を取り、短を捨て、實學講究  
致し、孔子の遺意に適ひ候様、御  
同意企望致したき事に御座候。  
今世の儒者動もすれば唐人の  
事は丁寧に申し、司馬溫公、朱文  
公、韓魏公などと稱へ、さて新田



義貞が云々、楠木正成が云々など申候類甚だ相濟まず。右様の人をば、僕は毎々和唐人と唱へ申候、御一笑下さるべく候。その外當世の學風其の弊少からず候へども、（トクモ）書中に盡くしかね候故、まづその一端を擧げ候のみに御座候。僕は最早貴地などへ出て候事は終身これなく候間、拜面もむづかしく候處、貴兄は御墓參御對面等にて御歸郷も御自由ゆゑ、もし來春など一寸も御歸郷に相成候はば、種々存候だけの事は御切磋商申すべく候。

先は今日は前文御申譯かたぐ一書を裁し候事に御座候。併しながら御覽の通り亂筆さぞ御讀みかねなされ候はんと閣筆致候。以上。（寺門誠所藏文書）

一三 ソクラテスの遺訓

穂積陳重

大聖ソクラテスの與へた最後の教訓は、實に國法の威嚴に關するものであつた。

今を去ること凡そ二千三百有餘年の昔、彼が單衣跣足の姿で、當



ソクラテス

時世界の文化の中心と稱せられて居つたギリシヤのアテネの市中、群衆雜沓の各處に現れて、其の獨得の會話法に依つて自負心の強い市民

を教訓指導し、特に青年輩の指導教訓に力を致したことは、甚だ顯著なる事實である。もとよりソクラテス自らは決して一世の指導者を以て敢へて自任して居たわけではない。唯人々と

穂積陳重

法學者

法學博士

東京帝國大學名譽教授

樞密院議長

男爵

大正十五年薨

年七十

ソクラテス

希臘の大哲學者

プラトンの師

（西曆前四七〇—前

三九九）

アテネ

古代ギリシヤ文

化の中心であつ

た市



共に眞善の何ものなるかを知らうと欲したのであつた。しかしながら彼の眞意を了解しない大多數の俗衆は、却つてソクラテスのために各自の自負心を傷つけられたものと考へ、これがために彼に對して怨を抱くこととなつたが、終に或機會を以て、彼は新宗教を輸入唱道して國教を顛覆し、且又詭辯を弄して青年の思想を惑亂する者であるといふ廉で訴へられることとなつた。かくてメレトスやアヌトスなどの誑言のために、とかくといろく／＼瞞着された結果、種々の裁判の末、我が大聖ソクラテスは遂に死刑を宣告せられることとなつた。

さて、いよいよ死刑が執行されるといふ日の前日になつて、ソクラテスの門弟の一人なるクリトーンはソクラテスに面會して、この不正なる刑罰を免れるために脱獄を勧めようと思つて、早

メレトス  
悲劇詩人  
アヌトス  
アテネの人  
(西曆前一三九七)  
クリトーン  
アテネの人

朝その獄舎に訪ねて來た。來て見た所が、ソクラテスはさも心地好ささうに安眠して居つたのである。クリトーンは、師がその死期の刻々に近づきつゝあるにも拘らず、かく平然自若たるを見て如何にも感嘆の情を禁めることが出来なかつたが、やがてソクラテスの眠より覺めるのを待つて、脱獄を勧めた。

クリトーンは、裁判の不正なること、刑罰の不當なることを説いて、師がかく生命を保ち得られる際に、自ら好んで身を死地に投じてこれを放棄せられるのは、寧ろ惡事を敢へて爲さんとせられるものであつて、今甘んじてこの刑に就くのは、これ即ち敵人の奸計に黨するものであると謂はねばならぬと述べ、又この際、妻や子供等を見捨てるのは、師が平素から、子供を教養することの出来ない者を儲けてはならぬと言はれた垂訓にも悖るもの



であり、又この容易にして危険のない脱獄を試みないのは、畢竟善にして勇なる所業を爲さないものであるから、平生徳義の貴ぶべきことを唱道せられた師としては、甚だ不似合なことで、自分分は師のためにも、はた又その友たるクリトーン自身のためにも、慚愧の念に堪へざる次第であると説き、尙その辭をつゞけて、さあ、どうぞ此處を能く御考へ下さい。否、もう御熟考の時は已に過去つて居ります。——私どもは決心せねばなりません。——今の場合、私どもの爲すべきことは唯一つだけ、——しかも、それを今夜中に決行せねばなりません。——若しこの機を外したなら、それは、とても取返しが付きませぬ。——さあ、先生、どうぞ私の勸告をお聽入れ下さいまし。情には脆く、心は激し易いクリトーンが、かくも熱誠を籠めて、そ

の恩師に對つて脱獄を勧めたのであつた。ソクラテスはその間、心靜かに師を思ふ情の切なるこの門弟子の熱心な勸誘の言葉に耳を傾けて居たが、やがて徐に口を開いて、答へて曰ふには、親愛なるクリトーンよ、汝の熱心は、若しそれが正しいものならば、その價値は實に量るべからざるものである。が、しかしそれが若し不正なものであるならば、汝の熱心の大なるに隨つて、その危険も亦甚だ大なるものではあるまいか。それ故余は先づ、汝の余に勸告する脱獄といふ事が、果して正しい事であるか、或は又不正の事であるかを考へる必要がある。余はこれまで、何時も熟考の上に、自分でこれが最善だと思つた以外のものには何物にも従はなかつたものであるが、それを今このやうな運命が俄に我が身に降りかゝつて來たからと



いつて、自分のこれまで主張して來た道理を、今更投棄してしまふことは決して出来るものではない。否、却つて余に取つては、是等の道理は恆に同一不易のものであるから、余の従前自ら主張し、尊重して居つたことは、今も尙余の同じく主張し尊重するものであるのだ。

と述べ、尙言葉をついで、

唯生活するのみが貴いのではない。善良なる生活を營むのが貴いのである。他人が己に危害を加へたからとて、我も亦他人に危害を加へるなら、それは、惡を以て惡に報いるもので、決して正義とはいへない。してみれば、今汝が言ふやうに、假令アテネの市民等が余を不當に罰しようとも、余は決してこれに報いるに害惡を以てすることは出来ないのである。

と言ひ、又、

若し余がこの牢屋を脱走せんとする際、法律及び國家が來つて、余に、ソクラテスよ、汝は何を爲さんとして居るか。汝が今脱獄を試みようとするのは、即ち汝がその力の及ぶ限り法律及び全國家を破壊しようとするものではないか。凡そその國家の法律の裁判に何等の威力もなく、また私人がこれを侮蔑し、蹂躪するやうな國家が、しかも尙能く國家として存立し、滅亡を免れることが出来るか。汝は考へるか。と問うたならば、クリトーンよ、我等はこれに對して何と答ふべきであるか。

と言ひ、尙これに次いで、國家及び法律を擬人して問を設け、國法の重んずべきこと、又一私人の判斷を以てこれに違背するは即ち國家の基礎を覆さんとするものであるといふことを論じ、更



にクリトーンに向かつて、

我等はこれに答へて、然れども國家は已に不正なる裁判を爲して余を害したり。」と答ふべきか。

と言ひ、クリトーンが

勿論です。

と言つたのに對して、

然らば、若し法律が、ソクラテスよ、これ果して我等と汝と契約した所のものであるか。汝との契約は、如何なる裁判と雖も國家が一度これを宣告した以上は、必ずこれに服従すべしとのことではなかつたか。」と答へたならば如何に。

と言ひ、更に又、假令惡しき法律にても、誤れる裁判にても、これを改めざる以上は、これに違反するは、徳義上不正である所以の理

を説破し、尙進んで、

凡そアテネの法律は、苟もアテネ人にして、これに對して不満を抱く者あらば、その妻子眷族を伴なうて何處へなりともその意に任せて立去ることを許して居るではないか。今、汝はアテネ市の政治法律を熟知しながら、猶この地に留つて居るのは、即ち國法に服従を約したものであるではないか。かゝる默契を爲しながら、一たびその國法の適用が自己の不利益となつたからとて、直ちにこれを破らうとするのは、抑、不正の企ではあるまいか。汝は深くこのアテネ市を愛するがために、これまでこの土地を離れたこととは唯一度イストモスの名高き競技を見るためにアテネ市を去つたのと、戦争のために他國へ出征したこととの外には、國境の外へは一足も踏出した

イストモス  
コリント地峽に  
ある  
イストモス祭は  
ギリシヤ四大國  
民祭の一で二年  
毎に行はれた



ことはなく、彼の跛者、盲人の如き不具者よりも尙他國へ赴いたことが少かつたのではないか。かくの如きは、これ即ちアテネ市の法律との契約に満足して居つたことを明らかに立證するものではあるまいか。且又この默契たるや、決して他より壓制せられたり、欺かれたり、又は急遽の間に結んだものではない。若し汝がこの國法を嫌ひ、或はこの契約を不正と思つたならば、このアテネ市を去る爲には、既に七十年の長年月があつたではないか。それにも拘らず、今更國法を破らうとするのは、これ即ち當初の默契に背戻するものではないか。と言つて、縷々自己の所信を述べ、

故にかゝる契約を無視すれば正義を如何にせん、天下後世の識者の嗤笑を如何にせん。若しクリトーンの勸説に従つて、

脱獄するやうなことがあれば、これ即ち惡例を後進者に遺すものであつて、却つて彼は青年の思想を惑亂する者であるといふ誹毀者等の偽訴の眞事であることを自ら進んで表白し、證明するやうなものではないか。

と言ひ、更に、

正義を忘れて子を思ふなかれ。正義を後にして生命を先にするなかれ。正義を輕んじて何事をも重んずるなかれ。

と説き、滔々數千言を費して、丁寧親切にクリトーンに對つて、正義の重んずべきこと、法律の破るべからざることを語り、よりて以て脱獄の非を教へ諭したので、流石のクリトーンも終に辭なくして、この大聖の清説に服してしまつたのである。(法憲夜話)



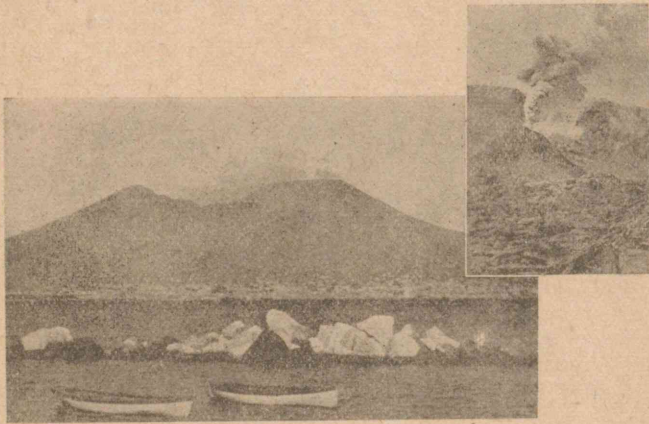
ヴェスヴィヤス  
イタリーの活火  
山  
ナポリ灣に臨む  
高さ一二八二米  
今電車が山頂ま  
で通じる  
森鷗外  
名は林太郎  
衛生學者で文學  
醫學博士  
文學博士  
陸軍軍醫總監  
東京帝室博物館  
長  
島根縣津和野生  
大正十一年卒  
年六十一  
ナポリ  
ヴェスヴィヤス  
火山の西南十四  
軒餘

一四 ヴェスヴィヤス

森鷗外

熔巖は月あかりにて見るべきものぞとて、我等は暮に至りてヴェスヴィヤスに登りぬ。レジナにて驢を雇ひ、葡萄園貧しげなる農家など見つ、騎り行くに、漸くにして草木の勢衰へ、はては片端になりたる小灌木、半ば枯れたる草の莖もあらずなりぬ。夜はいと明かけれど、強く寒き風は忽ち起りぬ。將に没せんとする日は熾なる火の如く、天をば黄金色ならしめ、海をば藍碧色ならしめ、海の上なる群がれる島嶼をば淡青なる雲に紛はせたり。眞に是、一の夢幻界なり。灣に沿へるナポリの市は次第に暮色微茫の中に没せり。眸を放ちて遠く望めば、雪を戴けるアルプスの山脈もて削り成せるが如し。紅なる熔巖の流は、今や目睫に迫り來りぬ。道絶ゆるところに、

黒き熔巖もて被はれたる廣き面あり。驢馬は蹄を下すごとに、



(口火の其と山火スヴィヴスエヴ)

し、松明を點じて導かんとす。

先づ探りて然る後に踏めり。既にして一つの隆起したる處に逢ふ。その狀、新に此の熔巖の海に湧出せる孤島の如し。されど其の草木は只丈低き灌木の疎に生ぜるを見るのみ。この處に山人の草寮あり。兵卒數人火を圍みて聖涙酒を飲めり。これは遊覽の客を守りて賊を防ぐものなりとぞ。われらを望み見て身を起し、劇しき風に焰は横さまに吹靡け

聖涙酒  
葡萄酒の名



られ、滅えんと欲して纔かに燃ゆ。我等の往手は巖の間なる細徑にて、熔巖の塊の蹄に觸るゝもの多し。處々道の險しき谿に臨めるを見る。

既にして黒き灰もて盛り成したる山上の山ありて、我等の前に横たはりぬ。我等は皆徒立となりて、驢をは口とりの童にあづけおきぬ。兵卒は松明振翳して斜に道取りて進めり。灰は踝を没し、又膝を没す。石片又は熔巖の塊ありて、歩ごとに滾り落つるが故に、縦に列びて登るに由なし。我等は雙脚に鉛を懸けたる如く、一步を進みては又一步を退き、只一つ所に在るやうに覺えたり。兵卒は、巖近し今一息に候と叫びて、我等を勵ましたり。されど仰ぎ視れば山の高きこと初に異ならず。一時ばかりにして纔かに巖に到りぬ。我は奇を好む心に驅られて、直ち

ルビー  
紅寶石

に踵を兵卒に接したれば、先づ足を此の山の巖に着けたり。巖は大なる平地にして、大小いろくなる熔巖の塊、錯落として途に横たはる。平地の中央に圓錐形の灰の丘あり。これ火坑の堤なり。火球の如き月は早く昇りて、此の丘の上に懸れり。我等の來路に此の月を見ざりしは山のために遮られぬればなり。忽ちにして坑口黒煙を噴き、四邊闇夜の如く、山の核心と覺しき處に不斷の雷聲を聞く。地震ひ足危ければ、人々相倚りて支持す。忽ち又千百の巨砲を放てる如き聲あり。一道の火柱直上して天を衝き、迸り出でたる熱石はルビーを嵌めたる如き觀をなせり。されど此等の石は或は再び坑中に没し、或は灰の丘に沿ひて顛り下り、また我等の頭上に落つることなし。われは心裡に神を念じて、屏息して、これを見たり。



兵卒は、客人たちは山の機嫌よき日に來あはせ給ひぬ。とて、我等を揮きて進ましめたり。われは初めその何處に導くべきかを知らざりき。火を噴ける坑口は今近づくべきにあらねばなり。導者は灰の丘を左にして進まんとす。忽ち見る、我等の往手に火の海の横たはれるありて、身幹數丈なる怪しき人影のその前にゆらめくを。これ我等に先だてる旅客の一群なり。我等は手足を動かして熔巖の塊を避けつゝ進めり。色褪せたる月の光と松明の火とは岩の隅々に濃き陰翳を形づくりて深谷の觀をなせり。忽ち又例の雷聲を聞きて、火柱は再び立てり。手もて探りて漸く進むに、石土の熱さを覺ゆるに至りぬ。巖罅よりは白き蒸氣騰上せり。既にして平滑なる地を見る。こは二日前に流れ出でたる熔巖なり。風に觸るゝ表層こそは黒く凝り

たれ、底は尙紅火なり。この一帶の彼方には又常の石原ありて、一群の旅客はその上に立てり。導者は我等一行を引ききて此の火殻を踐ましめたるに、足跡炙るが如く、我等の靴の黒き地に赤き痕を印するさま、橋上の霜を踏むに似たり。處々に斷文ありて、底なる火を透かし見るべし。

我等は彼の旅客の群に近づきて、之と同じく一大石の上に登りぬ。此の石の前には新しき熔巖流れ下れり。譬へば金の熔爐より出づる如し。其の幅は極めて濶し。蒸氣の此の流を被へるものは火に映じて殷紅なり。四圍は暗黒にして、空氣には硫黄の氣満ちたり。我は地底の雷聲と天半の火柱と此の流とを見聞して、心中の弱處病處の一時に滅盡するを覺えたり。我等は歸途に就きたり。此の時、身邊なる熔巖の流に、爆然聲あ



即興詩人

丁抹の童話作家  
で小説家たるア  
ンデルセンの作  
を森鷗外が譯し  
たもの

吉村冬彦

本名は寺田寅彦  
物理學者  
理學博士  
東京帝國大學教  
授  
帝國學士院會員  
昭和十年卒  
年五十八

りて、陷穽を生じ炎焰を吐くを見き。されどわれはまた戦き慄ふことなかりき。一行は積灰の新に降れる雪の如きを蹴て、且滑り且降るほどに、一時間の來路は十分間の去路となりて、何の勞苦をも覚えざりき。われも友も心に此の遊の徒事ならざりしを喜びあへり。促し立てて共に出づるに、風斂り月明らかなり。ナポリ灣に沿ひて行けば、熔巖の赤き影と明月の青き影と、波面に二條の長蛇を跳らしむ。(鷗外全集―即興詩人)

一五 地圖を眺めて

吉村冬彦

「當世物は盡して」安いものを列挙するとしたら、その筆頭にあげらるべきものの一つは陸地測量部の地圖、中でも五萬分一地形圖などであらう。一枚の代價十三錢であるが、その一枚から我

我が學べば學び得らるゝ有用な知識は到底金錢に換算することの出来ない程貴重なものである。今假にどれかの一枚を絶版にして、天下に撒布されたあらゆる標本を回收し、その唯一枚だけを残して、他は悉く焼いてしまつたとしたら、その残つた一枚は少くとも數百圓、相手により場合によつては一萬圓でも買手があるであらう。

一枚の五萬分一圖葉は、緯度で十分、經度で十五分の地域に相當するので、その面積は勿論緯度によつてちがふが、例へば東京附近でざつと二十七方里、臺灣では約三十一方里、樺太では約二十一方里位に當る。

この一枚の地形圖を作る爲の實地作業に凡そどれだけの手數がかゝるか、と聞いて見ると、地形の種類により又作業者の能力



により色々ではあるが、ざつと三百日から四百日はかゝる。それにより要する作業費は二三千圓であるが、地形圖の基礎になる三角測量の経費をも入れて勘定すると、一枚分約一萬圓位を使はなければならぬ。その他にまだ計算整理製圖製版等の作業費を要することは勿論である。

それだけの手数のかゝつたものが僅かにコーヒー一杯の代價で買へるのである。尤も物の價値は使ふ人次第でどうにもなる。地圖を読むことを知らない人には、折角のこの地形圖も反古同様でなければ何かの包紙になる位である。讀めぬ人にはアッシリヤ文は飛白の模様と同じであり、サンスクリット文は牧場の垣根と別に變つたことはないのと一般である。しかし地圖の言葉に習熟し

アッシリヤ  
古代メソポタミヤにあつた國  
サンスクリット  
古代印度の文語  
梵語



एवं मया श्रुतं । एकास्मिन्समये भगवाद्वाक्या वदन्त  
स्म जेतवनेऽनाथपिंडं स्यात्सिंहासने महता भिक्षुसंघेन साधुसंघवयो-  
दशभिर्भिक्षुगणैर्भिक्षानामिच्छतिः स्वविरमहाश्रावकैः सर्वैरर्हिसिंहा-  
सनाया स्वविरण च शारिपुत्रेण महामोक्षदायनेन च महाका-  
श्यपेन च महाकप्फिणेन च महाकात्यायनेन च महाकौशिलेन  
च रघुनेन च शुद्धिपथकेन च नन्देन चानन्देन च राहुलेन च

字文トツリクソンサと字文ヤリシツア

た人にとつては、一枚の圖葉は實にありとあらゆる有用な知識の寶庫であり、もつとも忠實な助言者であり、相談相手である。今、假に地形圖の中の任意の一寸角をとつて、その中に盛込まれただけのあらゆる知識を我等の「日本語」に翻譯しなければならぬとなつたら、それは大變である。等高線唯一本の曲折だけでも、それを筆に盡くすことは殆ど不可能であらう。それが「地圖の言葉」で讀めば、たゞ一目で土地の高低起伏、斜面の緩急等が明白な心像



となつて出現するのみならず、大道路の連絡や、山の樹立の様や、耕地の分布や種類の概念までも得られる。

自分は汽車旅行をするときはいつでも二十萬分一と五萬分一との沿線地圖を用意して行く。遠方の山などは二十萬分一で悉く名前が分り、附近の地形は五萬分一と車窓を流れる透視圖と見較べて、可なりに正確で詳細な心像が得られる。しかし、もし地形圖なしで、これだけの概念を得ようとしたら、恐らく一生を放浪の旅に消耗しなければなるまい。

この夏信州星野温泉から小瀬温泉迄散歩したとき、途中で道に分れるところに一人若い男が休んでゐたので、小瀬へはこちらでいゝかと聞くと、それでは反對で、白絲の瀧へ行つてしまふといふ。どうも變だと思つて五萬分一に相談して見ると、やつぱ

星野温泉  
小瀬温泉  
共に長野縣（信濃國）北佐久郡にある温泉  
白絲の瀧  
長野縣北佐久郡淺間山麓にある瀧

ピンポン  
卓球

ドライブ  
と自動車を驅ること

り自分の思つた方が正しい。それで構はず地圖の教へる通りに歩いて行くと、あとから先程の若い男が驅けて來て、ちよつと勘違しました、どうもすみません、すみません。といつて驅抜けて行つた。小瀬へ行つて見ると、その男はもうちゃんと宿屋にをさまつて子供とピンポンをやつてゐた。人間は勘違したり、故意にだましたりしても、五萬分一地形圖はいつも正直である。たまに、萬に一の地圖の誤を指摘して小言をいふ好事家があるにしても、陸地測量部地形圖の信用は小ゆるぎもしないであらう。唯一番面喰はされるのは、東京附近などで年々に新しく開設される電鐵軌道や自動車道路がその都度記入されてゐないことだけである。

東京附近へドライブに出るとき氣のついたことは、大抵の運轉



アップ・ツ・デート  
現代式  
最新式

ベルリン  
ドイツの首府

手が陸地測量部地形圖を利用しないで、却つて坊間で賣つてゐる不正確な鳥瞰的地圖を使つてゐることである。どうも地形圖の讀方をよく知らない運轉手が多いらしい。しかし又前記のやうに地形圖がアップ・ツ・デートでないためもあるかも知れない。

地形圖の價値はその正確さによる。昔ベルリン留學中彼の地の地理學教室に出入してゐた頃、一日某教授が面白いものを見せてやらう。といつて見せてくれたのは、支那の某地の地形圖であつた。やはり二十メートル毎位の等高線を入れてあつたが、それが一見して殆どいゝ加減な出鱈目なものであるといふことが分つた。等高線の屈曲配布にはおのづからな法則があつて、いゝかげんなものと、正直に實測によつたものとは自然に見

分けが出来るのである。

その時に痛切に感じたことは、日本の陸地測量部で地形圖製作に従事してゐる人たちの眞面目で忠實で物を誤魔化さない頼しい精神の有難さであつた。殆ど人跡未到な山の中の道のない所に道を求め、あらゆる危険を冒しても一本の線にも偽を描かないやうにといふその科學的日本魂のおかげであの信用の出来る地形圖が仕あがるのである。さういふ辛酸を嘗めた文化の貢獻者がどこの誰かといふことは測量部員以外誰も知らない。

登山流行時代の今日、スポーツの立場から嶮岨をきはめ、未到の地を探り得てチャーターナリズムを賑はしたやうな場合でも、實は古い昔に名の知れない測量部員が一度はそこらを縦横に歩き

スポーツ  
運動競技  
チャーターナリズム  
一般大衆の歡心  
を買ふことを目的とするもの



廻つたあとかも知れない。

上には上がある。測量部員が眞に人跡未到と思はれる深山を

歩いてゐたら、鏽び朽ちた一本の錫杖を見つけたといふ話もあるさうである。

地形測量の基礎になる大事な作業は謂はゆる一等三角測量である。

謂はゆる基線が土臺になつて、その上に謂はゆる一等三角點網を組立てて行く、これが地圖の骨格となる

べき鐵骨構造である。その網目の中に二等・三等の三角網を張渡し、それに肉や皮となり雜作となる地形を盛込んで行くので



(陸地測量部認可) 小瀬温泉附近圖

(陸地測量部認可)

ある。この一等三角點にはみんな高い山の頂上が選ばれる。

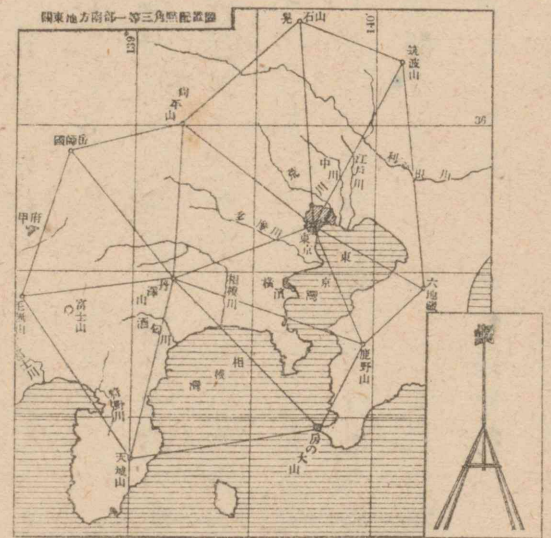
その理由は、各三角點から數十キロ乃至百キロの距離に

ある隣接三角點への見通しが利かなければならないからである。

それだから、三角測量に従事する人たちは年

が年中普通の人は滅多に登らないやうな山の頂上ばかりを捜してあちらこちらと

一等三角測量圖と視標



渡つて歩いてゐる。さうして天氣が悪くて相手の山頂三角點が見えなければ、幾日でもそれが見えるまで待つてゐなければ



毛無山  
 静岡縣富士郡柿  
 野村なる天子嶽  
 の北に於いて  
 みる山  
 標高一九四八米  
 天城山  
 伊豆半島の中央  
 に聳える高山  
 標高一四〇〇米  
 レコード  
 記録

ならない。去る大正十二年に起つた關東震災後の復舊測量では、毛無山の頂上で二十八日間頑張つて、天城山が頭を出すのを今か〜と待つてゐた人がある。古いレコードでは七十日といふのさへある。測量を始める前には、先づ第一に三角點の位置を選定する選點作業が必要である。この作業を行ふには、深山の峯から峯と一つ一つ登つて行つて、そこから百キロ以内の他の高峯との見透しを調べて歩かなくてはならぬ。一點を決定するのに平均二週間はかゝる。かくして三角點の配布が決定したら、次にはそれに櫓を組む造標作業を行ふ。場所によつては遠い下の方から材木を引上げなければならず、又見透しの邪魔になる樹木を伐らなければならぬ。これがためにも一點に約二週間はか

かる。

櫓が出来たら少くも一年は放置して構造の狂ひを十分に落着かせ、それからいよく観測にかゝる。一點における観測作業に、天氣がよくても二週間位はかゝる。技師一人、技手一人と測量人夫六名乃至十名位の一行で天幕生活をする。場所によつては水汲みだけでも中々の大仕事である。食料は米・味噌、その外に若布・切干・鹽魚などは贅澤な方で、罐詰などは殆ど持たない。野菜類の現場で得られるものは利用する。樺太ではいろいろ植物を片端から試験的に食つて見た人もある。溪流で小魚を掴みどりにしたり、野獸を射止めて思はぬ珍味にありついたりすることも折々はあるさうである。

北海道では熊におびやかされたり、食糧缺乏の難場で肝心の貯



テント  
天幕

藏所をこの「山のをぢさん」に掠奪されて二三日絶食した人もあ  
る。道を求めて瀧壺に落ちて危く助つた人もある。暴風にテ  
ントを飛ばされたり、落雷の爲に負傷したり、その外、山崩れ、洪水  
などの爲に一度や二度死生の境に出入しない測量部員は少い  
さうである。それにも拘らず技術官で生命をおとした人は殆  
どないといふのは、畢竟多年の経験による周到な準備と注意と  
によるものであらう。(寺田寅彦全集)

一六 登 山

田部重治

あざやかな雪を戴き、朝日を浴びつゝ、地平線上に雄偉なる姿を  
浮かべてゐる山相は、自然が作れる最も偉大なる藝術である。  
幾たび眺めても仰いでも、それは見る人に雄々しき心と氣高き

田部重治  
英文學者  
登山家  
法政大學教授、  
明治十七年(三歲)  
四富山縣富山市  
生

理想と漲る血潮とを與へずにはおかない。山の姿ほど無私な  
心を以て、清淨な魂を以て、あこがれ得るものはない。  
山を憧憬し、その姿に自らを空しうすることの出来る心に、純眞  
ならざるものはない。山を求むる心は、この偉大なる自然の藝  
術を通じて自然の魂と融け合ひ、それが最も活ける力であるこ  
とを感じる。山の姿に憧憬する心の淨化は、かくの如くして絶  
えず行はれてゆく。

かのアルプスの姿を見て、それを見るに堪へぬほどに醜いと思  
惟する文學者を多くもつてゐた歐洲の十八世紀は、社會のどの  
方面に於ても、偽善と常識とに目立ち、創造と感激とに乏しい時  
代であつた。また、歐洲歴史上、自然に對して深い憧憬をもつた  
時代は、最も意義ある時代であつた。希臘文化の歴史に於て、最



も光輝ある文學藝術を生み出した時代、また文藝復興期、十八世紀末から十九世紀の初めにかけての浪漫的時代は、何れもそれであつた。

日本の歴史に於て、自然を最もありのままの姿に於て讚美し、氣高い山の姿に限りない渴望の眼を向けたものは、日本民族の最もあかるい、最も清純な情緒の源泉ともいふべき、かの萬葉の詩人であつた。その後、大自然を崇拜し、それに傾倒する心持は餘り著しく表現されてはゐないけれども、それは一つの傳統となつて民族の一部には登山の風習は絶えることなく行はれてゐた。しかし明治の時代になつてからは、この傾向は急激な歩みを取るやうになつた。ち大自然崇拜の精神は、登山の一般的風習となり、その文學となり、妻まじい勢を以て社會の各方面に動いてゐる。

かくしてあそこの山、この溪谷は攀ぢられ探究された。のみならず、今まで顧みられなかつた文獻が引出され、山岳溪谷に關する傳説が求められるに至つた。昔から登ることが不可能とされた山、足を踏入れることの出来ないと思はれてゐた溪谷も、追々知られるやうになつて、今では溪谷の或物を除いては、窮められないところが殆どなくなつた。

しかし山を眞に愛する人には、山を窮め溪谷を探り終へるといふことは、彼の山に對する悦の一小部分に過ぎない。彼の喜悅の大部分は、彼がこれらの自然に對して抱き得る無限の主觀的な情緒に存してゐる。いつまでも同一の山、同一の溪谷に對してすら湧出する無限の感情に存する。山に對する憧憬は、



かくして絶えず向上し進展する。それはいつも無限に自己を超越する感情である。

一たび頂上を窮めると、その山に對する興味を失ふ人、一つの山が持つ溪谷深林、その美はしい色調、その朝夕の光線によつて全容に與へる變化、一步々々を運ぶ間にも起る刻々の響と靜寂との多様、そしてこれらの官能的に映ずる現象の下を流るゝ自然の生命の動きを認め、それに耳を立てることをしない人は、自然を機械的に見る人でなければならぬ。

自然の征服といふ言葉は、近代人の作つた最もあさましい言葉の一つである。山に憧憬する人の抱く心は、いつも自然との一致融合でなければならぬ。最もよい意味に於て、自然を征服することは、自然を最もよく理解し、自然と融合することである。

ればならない。

私は山を愛するといふことは、量的に見た山岳の跋渉に存するのではなくして、飽くまで主觀的に、質的に山岳に對して深まり行く情緒に存することを深く信ずるものである。(山と谿谷)

土井晚翠

名は林吉

英文學者

詩人

第二高等學校名

譽教授

帝國藝術院會員

明治五年(五三)

陸前國(宮城縣)

仙臺生

九月二十九日

一七 鷺

紫にほふ横雲の

露や染めけん花すみれ、

花に戯るゝ蜂蝶の

愛か恨かうつし世の

はかなき春をよそにして、

大空のぼる鷺一羽、



嵐は寒し、道さびし。

春の姿はたへなれど、

花の薫はにほへども、

その春よりもうるはしく、

その春よりもかんばしき

雲居のをちをめぐらしつゝ、

大空高く鷺一羽、

嵐はきびし、道かたし。

背には無限の天を負ひ、  
緑雲はねにつんざきて、

頭韻  
脚韻  
折返し

飛行くはてはいつくぞや。

望のあした持ちきたる新しき望を待つまよひ、

高きかをりのあととめて、  
高きものをこめて、

大空めぐる鷺一羽、

嵐はつらし、道すごし。

嗚呼コーカサス峯高く、

千里の叢雲むらだちて、

下界のひびきやむところ、

天上の火を奪ひ來し

彼のたぐひか、青雲の

大空翔る鷺一羽、

コーカサス

黒海とカスピ海  
との間にある山

脈

天上の火

プロメテウスと  
いふ火の神をさ  
す



横井也有

尾張名古屋の俳人

天明三年(西曆)

年八十二

莊周

昔者莊周夢爲

胡蝶栩栩然

胡蝶也自喻適

志與不知周

也俄然而覺則

蘧々然周也

知周之夢爲胡

蝶與胡蝶之夢

爲周與(莊子)

古今の序

花に鳴く鶯水に

住む蛙の聲を聞

けば生きたし生

けるものいづれ

か歌をよまざり

ける(古今集序)

古池

古池や蛙飛込む

水の音(芭蕉)

嵐ははげし、道遠し。(天地有情)

百蟲譜

横井也有

蝶の花に飛びかひたる、優しきものの限りなるべし。それも啼く音のあいなければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこのものに託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。おぼろ月夜の風しづまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、このものこと更にもそしりがたし。

蟬はた、五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。や、日ざかりに啼きさかる頃は、人の汗絞るこゝちす。されば初蝶とも初





やがて死ぬ  
やがて死ぬけし  
きは見えず蟬の  
聲(芭蕉)

筆蹟  
梅の散るあたり  
や炭のあき俵  
七十九翁蘿隠

貧の學者  
晋の車胤

蛙ともいふことを聞かず、このものばかり初蟬といはるゝこそ  
大きな手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えず」と、このもの  
上は翁の一句に盡きたりといふべし。  
螢は類ふべきものなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草

梅のあき  
あきらや  
炭の  
俵は依

筆有也井横

にすだく、五月の闇は、たゞこのものの爲にやとまでぞ覺ゆる。  
然るに貧の學者に捕へられて油火の代りにせられたるは、この  
ものの本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは殊の  
外の不自由なり。俳諧にはその真似すべからず。



茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎてゆふべは草に露おく頃ならん。つくくぼふしといふ蟬はつくしこひしともいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。と世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

芋蟲は腹立つものにたとへ、毛蟲はむづかしき親父の號とす。背蟲・吝蟲は名のみにして蟲ならず。油蟲といふは蟲にありて憎まれず、人にありて嫌はる。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身を焦すや。蜉蝣ははかなきためしに引かれ、蓼食ふ蟲は物ずきの謗となれり。

同じ實の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黄金蟲は賤し。

槐安の都

淳于棼醉夢入大槐安國。見王。王曰吾南柯郡屈脚爲守。凡二十載。使者送出穴。遂寤。尋古槐下蟻穴。乃槐安國。又一穴直上三南枝。即南柯郡也。

(異聞集)

蟪蛄

欲以蟪蛄之斧。禦隆車之隧。(文選)

原・吉原

共に東海道宿沼津の西

蟻は明暮に忙しく世の營に隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都を逃れてその身の安きことを得ん。さるも便あしき方に穴をあけて千丈の堤を崩すべからず。狗の齒に噛まる、蚤はたま／＼にして、猿の手に探らる、虱は免る、こと難かるべし。蟪蛄のやせたるも斧をもたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこのたぐひあるべし。蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。たゞ原・吉原を駕籠にのりて富士を眺めゆく人に似たり。促織・鈴蟲・響蟲はその音の似たるをもて名によべり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名をつきたるならん。毛生ひ、むく



竹林の七賢

嵇康  
阮籍  
山濤  
向秀  
劉伶  
阮咸  
王戎

永田秀次郎

政治家  
元拓務大臣  
貴族院議員  
拓殖大學々長  
帝國教育會長  
明治九年(三五六)  
淡路國(兵庫縣)  
生

震災

作者は關東大震災當時東京市長であつた  
大正十二年九月一日に起つた關東地方の大震災

つけき蟲にも、同じ名ありて、松をからし、人にうとまる。一在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃端居珍しき夕始めてほのかに聞きたらん、又は長月のころ力なく残りたるは、寂しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊やりたく里の煙など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊はことに烈しきを、かの竹林の七賢の夜話には、いかに團扇のひまなかりけん。(鶏衣)

一九 震災雜詠

永田秀次郎

焼け出されて離散した人、旅や外出の爲に家に居なかつた人たちは二日の朝から夜となく晝となく、妻子や父母を捜して上野

や日比谷や芝などを根氣よく見廻つて居た。到るところの柱や壁や銅像にまでも立退先の貼紙がべたべたと貼りつけられた。互に尋ね合つて居る間の心配と苦心とはどんなであつたらう。漸くにして廻り合つた時の嬉しさは又どんなであつたらう。罹災しない人には何としてもこの氣持はわからない。

露三日妻子に逢ひぬ増上寺

一夜、深更に市中を巡つて見た。満目皆焦土、遙かに淺草寺の儼然たる黒き影が立つて居る。大空を仰ぎ見れば、銀河が斜に横たはつて萬籟寂たり、鳴くべき蟲も生残つては居ない。

天の川の下に残れる一寺かな

花の都の秋の月といふは名のみであつて、今年ばかりは雲井の月も照らすものなき一面の燒野原の眞中を、冷かに沈んで流れ

増上寺

山號は三緣山  
芝區芝公園にある淨土宗の大本山

淺草寺

山號は金龍山  
淺草區淺草公園にある天台宗の名刹  
本尊は名高い淺草觀音である



隅田川  
武蔵國荒川の下流  
東京市荒川區千住以南の稱

行く隅田川の兩岸には、紅燈綠酒の夢の跡も今は空しく、倒れた燈籠や焦げた庭石に昔を偲ぶのみである。

焦土の底行く月の隅田川

燒跡を見廻つて居ると、堂々たる大きな邸宅が跡方も無く燒拂はれて、唯石の門柱と鐵の扉だけが嚴めしく残つてゐるのを懇にも堅く鎖してある。隙間からは唯黒焦げの庭木と燈籠ばかりが見えて、秋風の渡る度に灰煙が捲起つて、鐵柵の目から外部へ吹出される有様がいかにも物寂しく思はれた。

秋風や家焼けたるに鎖す門

馬場先門内には、避難者の爲に數百のテントが出来た。天高く秋清き日には、遠近の松の木の翠の間に、白妙の鮮かに彩られた様はあはれにも亦心安げに見えた。明月のさやかに照らす秋

馬場先門  
舊江戸城内郭諸門の一  
日比谷公園の北和倉門の南

の夜更けて、手に取る如くに近く二重橋を仰ぎ見た時は、何とかなしに、忝さに涙こぼるゝ心地がした。

松遠近茵の如きテントかな

勿體なや隣は月の二重橋

俄作りのバラックの中で、雨の夕暮、風の夜半の住心地は如何であらうか。一夜野分の吹きすさぶ時、市吏員を數隊に分つて、自動車を驅つて各所のバラックを見廻らしめたが、幸に大いなる故障が無かつた。

バラックに人生きて居る野分かな

朝日を受けて、テントの坂を搾る白露がとぼり／＼と芝生の上に落ちる。その下には子供や大人の下駄が立てかけて乾かしてある。それも古びた寄せあつめものと見えて、どれを見ても

バラック  
假舎



片跛である。人の世の秋のあはれさがしみくくと胸の中へ浸みわたる心地がする。

露けしやテントの外の跛下駄

庭木は皆焼けた。松など殊に枯れ易いと見える。震後一箇月の後に市中を巡つて見ると、櫻や楓の木の枝は皆焼けて、根元から新しい若芽が吹いて居るのがある。最も耐火力があつたかと思はれるのは銀杏と棕櫚である。中にも棕櫚は葉も幹も根も皆枯れてしまつたと思つて居ると、黒々に焼焦げた頭から、何時となく青々として勢のよい新芽がふいて來た。そして其の芽の針の尖にきら／＼と露を含んで朝日に光つてゐるのを見ると、何となく生々とした心強い嬉しい復興の氣分が湧いて來る。

焼けてなほ芽ぐむ力や棕櫚の露

復興のバラックはお粗末ながら追々と建並んで行く。淺草方面は最も多數に出來た。十一月中旬には全市に十一萬戸ばかり建つた。市中を巡つて見ると、低い亞鉛屋根が連なつて居る中に、處々に焼残つた煉瓦の建物が際立つて高く突立つて居る。その頂上の塔には大きな時計が附いて居て、どれもこれも十一月五十八分といふ時刻を指したまゝに残つて居る。私は此の時計を見る度に、何時も厭な恐しい寂しい氣がしてならない。

行く秋やとまりしまゝの屋根時計 (青嵐隨筆)

二〇 東路の旅

東山の邊なるすみかを出でて逢坂の關打過ぐる程に、駒ひきわたる望月の頃もやうく、近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き

逢坂の關

逢坂の關の清水にかげ見えて今や曳くらむ望月 (紀實之)



遊子

遊子猶行ニ於殘月一函谷鷓鴣鳴。  
宇多天皇の皇子  
敦實親王の雜色  
琵琶の名人

藁屋

世の中はとでもかくても過してむ宮も藁屋もはてしなれば  
打出濱  
今の大津市の内  
松本石場あたり  
大津宮  
滋賀郡滋賀村滋賀里にあつた  
大津市の北四軒

満誓沙彌  
笠朝臣麻呂  
養老頃の人

漕ぎゆく舟

世の中を何にたとへむあさぼらけこぎゆく舟のあとの白波  
(拾遺集)

夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかに音づれて、遊子なほ残月に行きけん函谷の有様思ひ出でらる。昔蟬丸といひける世捨人、この關のあたりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を弾きて心を澄まし、和歌を詠じて懷を述べけり。嵐の風の烈しきを侘びつゝぞ過しける。

の關

關山を過ぎぬれば、打出濱・粟津原など聞けども未だ夜の中なれば、さだかにも見え分かず。昔天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本宮より近江の志賀の郡に都遷りありて、大津宮を造られけりと聞くにも、このほどは古き皇居の跡ぞかしと覺えてあはれなり。

故郷

さゝなみや大津の宮のあれしより名のみ残れる志賀の曙の空になりて、勢多の長橋打渡すほどに、湖遙かにあらはれて、かの満誓沙彌が比叡山にてこの海を望みつゝ、詠めり  
けん歌思ひ出でられて、  
漕ぎゆく舟のあとの白波。誠にはかなく心細し。



(筆重廣) 橋長の多勢

世の中をこぎゆく舟によそへつゝ、ながめし跡をまたぞながむる  
漕ぎゆく舟のあとの白波  
世の中を何にたとへむあさぼらけこぎゆく舟のあとの白波  
(拾遺集)







柏原

滋賀縣坂田郡柏原村

不破の關屋

岐阜縣不破郡關ヶ原町にあつた

後京極攝政

藤原良經

建永元年(一一六〇)

卒

年三十八

荒れにし後

人すまぬ不破の關屋の板びさし

あれにし後はた

だ秋の風

(新古今集)

つれ  
と詠めるもかやうの處にや。

道のべの木かげの清水むすぶとてしばしすまぬ旅人

ぞなき

柏原といふ處を立ちて、美濃の國關山にもかゝりぬ。谷川、霧の底にも音づれ、山風、松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心細し。越えはてぬれば、不破の關屋なり。萱屋の板庇年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の荒れにし後は、たゞ秋の風とよませたまへる歌思ひ出でられて、この上は風情もめぐらしがたければ、鄙しき言の葉を残さんもなか／＼に覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。  
株瀬川といふ處に泊りて、夜ふくる程に川端に立出でて見れば、

株瀬川

岐阜縣不破郡にある川

は川筋が變つた

照る月なみ

水のおもに照る

月なみをかぞふ

ればこよひぞ秋

の最中なりける

(拾遺集)

二千里の外

三五夜中新月色

二千里外故人心

(白氏文集)

芳賀矢一

國文學者

文學博士

東京帝國大學名譽教授

國學院大學長

帝國學士院會員

福井生

昭和二年卒

年六十一

秋の最中の晴天、清き川瀬にうつろひて、照る月浪も數見ゆばかりに澄渡れり。二千里の外昔の友人の故人の心、思ひやられて、旅の思いと、抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、

花洛を出でて三日、

株瀬川に宿して一宵。

しば／＼幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、

かつ／＼遠情を前途一千里の雲に送る。

などある家の障子に書きつくるついでに、

知らざりき秋のなかばの今宵しもかゝる旅寢の月を見

むとは

(東關紀行)

二一月雪花

芳賀矢一



赫々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照らす。月の光は溫和で日光の様に峻烈ではない。日は仰いで見ること出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、群陰皆影を伏して大小の有象無象悉く照破されるのであるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせて了ふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴はない清冷の光である、高潔無垢崇美と稱ふべきやさしい光である。休息安靜の夜には最もふさはしい。この光に對しては誰しも人生の慰藉を感じる、詩的情緒が油然として湧く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帯の椰子の陰、寒地の氷雪の家、眺める人の心は違ふであらうが、限なく世界を照らす月光の人の胸懷に

光り輝く月

打向かふ  
荷田蒼生子の歌

しみ渡ることは、恰もその影の千草の露の玉毎に宿るやうなものである。「打向かふ月は一つの影ながら、うかぶはちの思なりけり」である。東西古今、悲喜哀歡の情熱は幾萬回となく、幾億



(筆亭和藏) 月

ちて居る。天文學者はいふ、月は地球の衛星で全く死んだ冷塊である。この冷たい光が古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又與へつゝあるか。月は永久に人間の良友である。

回となく、この光  
に向かつて訴へ  
られた。之を嘆  
嗟し、之を吟咏し  
た詩歌は世界各  
國の言語に充滿



花ならば  
律師仙覺の歌

三千世界  
宋の劉師道の詩

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、その純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓茅屋も皆同じ色に埋められる。げにや花ならば咲かぬ梢もまじらましなべて雪降るみ吉野の山といふやうに眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふ。「三千世界銀成色、十二樓臺玉作層」の美觀は一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白の色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川を残して、山といはず、野といはず、また、く中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しもかはらぬ。花紅葉色々の眺はもとより美しいに相

違ない、花の散つたのちの新緑の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡くしたものである



雪 (筆亭和瀧)

たものではある  
まいか。一年中  
蓮の花の開いて  
居る極樂淨土は  
決して我等の世  
界程楽しいもの

ではないであらう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花



のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれ、咲きかはり咲きみだれるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、かうばしい匂さへもつて居る。菜や大根の如く食用の爲に作つた野菜類の花でも無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花に價の生じたのは無理は無いが、山の花、野の花、いづれも月や雪と同じ様に、一文錢を要せぬのである。人世に花なくんば、いかばかり寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間にも、一輪の花が必要である。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を忘れぬのである。月雪のながめはその高潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艷麗華美を以て、人世を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ花やか花々しい華美華麗華奢等の語は皆花に

花をし見れば  
年ふれば齡は老  
いぬしかはあれ  
ど花をし見れば  
物思もなし  
(藤原良房)

やまざくら  
康資王母の歌

基づいた語である。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余は唯「花をし見れば物思もなし」といふ古歌を以て、總べてを總括し得べしと信ずる。



花 (筆亭和瀧)

月雪花三つのながめは各、その特色がある。いづれを前、いづれを後といふことが出来ぬ。

やまざくら花の下風吹きにけり木のもとごとの雪のむらぎえ  
これは花を雪にたとへたものである。



冬ながら  
清原深養父の歌

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやある  
らむ

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し  
謠曲葛城の句

笠は重し、吳山の雪靴はかんばし、楚地の花。肩上の笠には無

影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とにたとへたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月花を愛して雪をめでぬ人も無い。思へば世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は即ち人の家である。この地の人は寸紅の眼を楽しませるものも持たない。又之に反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見たことがない。瓦斯電燈の光に不夜

城の觀を呈して夜深を知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見ることが出来ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花のながめは古人の歴史が加つて一層の感興が増す。

世々を経てながめし人の數にまたわれをもゆるせ秋の

夜の月

月は古來の歴史を照らす鏡である。

年々歳々花相似、歳々年々人不同。

鬢の霜、頭の雪。人生の感は花を見えます。繁く雪を見ていよいよ多いのである。

二千五百有餘年來、月雪花三つのながめを有し得るわれら祖先

世々を経て  
伊藤仁齋の歌

年々歳々  
唐の劉延芝の句



北畠親房  
吉野朝の忠臣  
大納言  
從一位准三后  
正平九年(1178)  
卒

年六十三  
贈正一位

又の年

延元三年(998)  
正月顯家は鎌倉  
田發東海道から  
美濃・伊勢・伊  
賀を経て奈良に  
入った

顯家

親房の長子  
延元三年(998)  
戰歿

親王

義良親王  
後御即位あつて  
後村上天皇と申  
し奉る

男山

京都府(山城國)  
石清水八幡宮の  
鎮座する山

義貞  
新田義貞

陸奥の皇子  
義良親王

顯信

親房の次子  
顯家の弟

國  
陸奥國

異母の御兄

尊良親王は越前  
金ヶ崎で御自害  
護良親王は足利  
直義に執せられ  
給ひ宗良親王だ  
け御在世

の遺蹟は、如何に多くの感興をわれらに與ふるよ、如何に多くの追慕をわれらに催さしむるよ。(月雪花)

秋霧

北畠親房

又の年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿、また親王を先だて申し、かさねて打上る。海道の國々悉く平ぎぬ。伊勢・伊賀を経て大和に入り、奈良の京になむ着きにける。これより度々の合戦あまた、び互に勝負侍りしに、同じき五月、和泉の國にての戦に、時や到らざりけむ、忠孝の道こゝにて極まりぬ。苔の下にも埋れぬものとは、たゞ徒に名をのみぞ留めてし。心憂き世にも侍るかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて暫く合戦ありしかど、朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退

く。北國に在りし義貞も度々召されしかど上りあへず、させる事なくして空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。

さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子又東へ向かはしめ給ふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敘せられ、陸奥介鎮守府將軍を兼ねて遣はさる。東國の官軍悉く彼の節度に従ふべき由を仰せらる。親王は儲の君に立たせ給ふべき旨申し聞かせたまひ、道のほども忝かるべし、國にてはあらは

させたまへとなむ申されし。異母の御兄もあまたましましき、同母の御兄も前東宮恆良親王、成良親王ましまししに、かく定まり給ひぬるも、天命なれば忝し。

七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮にこの由を啓して御船の巖ひし、九月の初、纜を解かれしに、十日頃の事にや、上總の地



伊豆の崎  
石廊崎  
伊豆半島の最南端

内の海  
霞ヶ浦

近くより、空の氣色おどろくしく海上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方に漂はれ侍りしに、いと波風夥しくなりて、數多の船行方知らず侍りけるに、皇子の御船は障りなく伊勢の海に着かせ給ふ。顯信朝臣は元より御船に候ひけり。同じ風のまぎれに、東を指して、常陸の國なる内の海に着きたる船侍りき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東西に吹分けらる。末の世には珍かなる例にぞ侍るべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居も如何と覺えしに、皇大神の御前申さしめ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせましたして、御目の前にて天位を嗣がせ給ひしかば、いと思ひ合はせられて尊くも侍るかな。又常陸はもとより志す方なれば、御志ある輩相計らひて、義兵こはくなりぬ。

舊都

京都

光明院おはす

冬

實は八月二十八日

ぬるが内

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現とは見ず(壬生忠岑)

仲尼

孔子の字  
孔子は魯國の史記「春秋」を筆削して筆を獲麟に絶つた

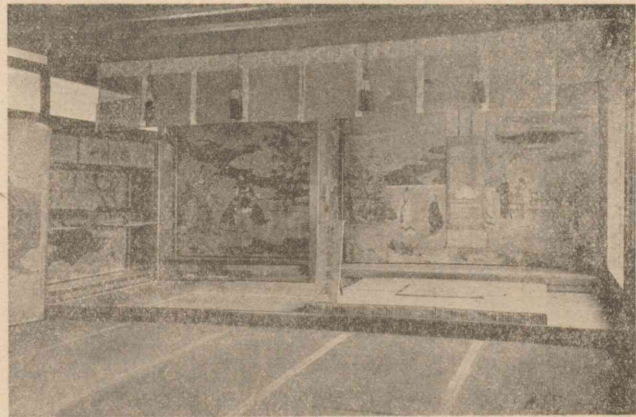
さて舊都には、戊寅の年の冬改元して曆應とぞいひける。吉野の宮にはもとの延元の號なれば、國々も思ひくゝの號なり。唐土にはかゝる例多けれど、この國には例なし。されど四年にもなりぬるにや。大日本島根は固よりの皇都なり、内侍所神璽も吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。さて八月の十日餘り六日にや、秋霧に冒されさせ給ひて、かくれましましぬとぞ聞えし。ぬるがうちなる夢の世は、今に始めぬ習とは知りながら、かずく目の前なる心地して、老の涙も乾きあへねば、筆の跡さへ滞りぬ。昔仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、こゝにて止りたけれど、神皇正統の邪なるまじきことわりを申し述べて、素意の末をもあらはさまほしくて、強ひて記しつけ侍るなり。



二月十四日

左大臣  
關白左大臣藤原  
經忠

諸皇子  
鷹坂・忍熊の諸  
皇子  
胎中天皇  
應神天皇



吉水神社 吉野朝皇居遺蹟

かねて時をも悟らしめたまひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第へ移し奉られて、三種の神器を傳へ申さる。後の號をば仰のままにて後醍醐天皇と申す。天下を治めたまふこと二十一年、五十二歳おましましき。昔仲哀天皇熊襲を攻めさせたまひしとき、行宮にて神さりましたまひされど神功皇后程なく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮められて胎中天皇の御代に定まりき。この君聖運ましまししかば、百七十餘年、中絶えにし一統の天下を知らせたま

御怨念

玉骨はたとひ南山の苔に埋るとも魂は常に北關の天を望まんと思ふ若し命を背き義を輕んぜば君も繼體の君に非ず臣も忠烈の臣に非じとて委細に繪言を殘されて左の御手に法華經の五の卷を持たせ給ひ右の御手に御劍を按じて八月十六日の丑の刻に遂に崩御なりけり(太平記)

今の帝  
後村上天皇

元弘三年  
後醍醐天皇の御代(一九三)  
源長年  
名和長年  
船上山  
鳥取縣(伯耆國)  
東伯郡に峙つ山

ひて、御目の前にて日嗣を定めさせたまひぬ。功もなく徳もなき盗人世をとりて、四年餘りがほど宸襟を惱まし、御世を過させたまひぬれば、御怨念の末空しく侍りなむや。今のみかど亦天照大神よりこの方の正統を受けましましぬれば、この御光に争ひ奉る者やはあるべき。なか／＼かくて鎮るべき時の運とぞ覺え侍る。(神皇正統記)

二 月の夜さむ

題しらず 後醍醐天皇御製  
忘れめや寄るべもなみの荒磯を御船のうへにとめし心は  
この御製は元弘三年隱岐國より忍びて出でさせ  
給ひける時源長年御迎へに参りて船上山といふ



處へなし奉りける程の忠例なかりし事など記し  
おかせましましけるものの奥に書添へさせ給ひ  
けるとぞ

元弘三年九月十三日三首の歌講ぜられし時月前擣

衣といふことを

聞きわびぬはつき長月ながき夜の月の夜さむにころもう

つ聲

百首の歌よませ給ひて前大納言爲定の許へ遣はさ

れける中に 後村上天皇御製

あはれはや浪をさまりて和歌の浦にみがける玉をひろふ

世もがな

吉野の行宮にて人々に千首の歌めされし序に山花

十月二十五日

爲定  
藤原氏  
歌人  
新千載集の撰者

といふ事をよませ給ひける

長慶天皇御製

わが宿と頼まずながら吉野山花になれぬる春もいくとせ

土佐國にて百首の歌よみ侍りける中に海邊霞を

中務卿尊良親王

春がすみかすむなみぢはへだつともたよりしらせよ八重

の潮風

東の方に久しく侍りて只管武士の道にのみたづさ

はりつゝ征東將軍の宣旨など下されしも思の外な

るやうに覺えてよみ侍りし 中務卿宗良親王

おもひきや手もふれざりし梓弓おきふし我が身なれむも

のとはし

土佐國

元弘二年(九七)

北條氏の爲に土  
佐國幡多に流さ  
れ給ひ翌年御歸

尊良親王

後醍醐天皇の皇

子  
延元二年(九七)  
越前金ヶ崎城で  
御自害

宗良親王

後醍醐天皇の皇

子  
新葉集の撰者



籠打指原  
埼玉縣(武藏國)  
入間郡所澤の西  
四軒

一 解釋  
二 例

一 因縁代名詞  
二 例

新待賢門院  
後醍醐天皇の中  
宮藤原廉子

文貞公

藤原師賢  
吉野朝の忠臣  
大納言  
延元二年(一九七)  
卒  
年三十二  
贈太政大臣

同じ頃武藏國へ打越えて籠手指原といふ處におり  
ゐて手分などし侍りし時いさみあるべきよしつは  
ものどもに仰せ侍りしついでに思ひつゞけ侍りし  
君のため世のためなにか惜しからむ捨ててかひある命な  
りせば

後醍醐天皇かくれさせ給ひて又の年の春花を見て

新待賢門院

時しらぬなげきのもとに如何にしてかはらぬ色に花の咲  
くらむ

元弘元年八月俄に比叡山に行幸なりぬとて彼の山  
に登りたりけるに湖上の有明ことにおもしろく侍  
りければ

文貞公

相馬御風

名は昌治  
文學者  
明治十一年(一八八五)  
○新潟縣生  
石川啄木  
名は一  
歌人  
新聞記者  
岩手縣生  
大正元年歿  
年二十七

二二二

二四 縮むものの力

相馬御風

故人石川啄木の歌に、

一晚に咲かせて見むと梅の鉢を火にあぶりしが咲かざ  
りしかな

といふのがある。此の歌を時々私は思ひ出して口ずさむが、そ  
のたびに私はまづ此の一首の歌に籠められた作者の皮肉な心  
持に一種の軽い苦笑を誘はれるのである。しかし其の苦笑感  
は忽ちにして作者その人に對する痛ましき感じに變つて、私  
を深い憂鬱にさへ陥れることがある。



「何といふ痛ましい焦燥であらう。」

かう私の心が叫ぶと同時に、私は石川啄木その人のあの晩年の苦悶生活の底知れぬ暗さを思ひやらずには居られぬのである。



石川啄木  
(五味清吉筆)

花は咲くべき時に到らなければ、決して咲かない。咲くべき内部の力が充實し切つた瞬間に達しなければ、花は決して咲きはしない。それを火にあぶつてまでも無理に咲かせようとして焦り狂つてゐる其のいらだたしい心、それほど悩ましい心がまたとあらうか。

それについて思ひ出すのは、嘗て私は長い北國の冬籠りのわびしさの中にあつて、鉢植にして置いた雛菊の花の唯一輪開くのを見ただけの事によつて、限りなく大きな歡を與へられた事についてである。私はその時の經驗について、當時次のやうなことを何かに書きつけたと記憶する。

ほんのりと雪明りのさしてゐる窓際の臺の上に置いた鉢植の雛菊が、やうやく一輪だけ咲いた。いかにもやはらかさうな緑の葉の間から二寸ほどの莖を眞直に伸して、その上に白い小さな花が小首をかしげながら咲いてゐる。僅かにこの小さな一鉢の春の草を眺めてゐるだけでも、私にとつては測り知るべからざる歡がある。花は無論部屋のぬくみがあればこそ咲いたのだ。しかし、又それは單にぬくみだけで咲い



たのではない。曇硝子を透して来る光線も、無論それに與つてゐる。けれども花はやはり花それみづからの生命の力の充實を俟つて始めて咲いたのだ。外からの力がいかに加つても、内なる生命の充實を得なければ花は咲かない、花の咲くその最後の一瞬間の生命の充實——それを私は始めてしみじみと見入ることが出来た。僅かに一つの小さな鉢に植ゑられた此のさゝやかな生命あるものの働によつて、私の書齋全體がいかに活氣づけられたことか。

「花が咲いた。花が咲いた。」

子供たちまでが此の小さな一輪の花の咲いたことによつて、躍り上らんばかりの歡を與へられたのである。

私は今かうした其の時の私の氣持と、前に掲げた病詩人啄木の

歌にこめられた悲痛な心とを比べて、今更のやうに深く考へさせられるのである。

「縮むものに彈力あり。」——私たちはよくさうした言葉を耳にする。そしてそれによつていつも深く自らを警められてゐるのを覺える。だが、私はそれを儼然たる一箇の事實として私の心眼に見せられたのは、前述の私の經驗によつてであつた。

固く結んだあの小さな花の蕾のうちにこめられた偉大な生命の力。それを感じさせられたあの瞬間の感激は、全く何といつて見やうもなく尊いものであつた。外に向かつて花と咲く力は實に内に向かつて貯へられるだけ貯へられ、籠められるだけ籠められた力の極致である。堅い地面を破つて小さな物の種



の芽の伸出る力、厚い殻を破つて卵の中から鳥の生まれ出る力、何れもこれ決して外に出ようとのみあせり立つた力ではなくして、内に籠れるだけ籠つた力の自らなる爆發に外ならぬ。縮めるだけ縮んだもののうちに充實しきつた力こそ此の世にあつての最も偉大な力ではないか。そんな事を私は同時に考へさせられたのであつた。

以前から私は角力を見るのが好きであつた。しかし、角力を見て居て私の最も壯快に感ずるのは、二個の人物の闘つてゐる情態や勝負の如何であるよりも、二人の力士が互に睨み合つたあの瞬間の緊張味である。土俵の真中で二人の力士の睨み合つた瞬間に於ける肉體の緊張ほど美しい人間の肉體を私は他

に見ることが出来ない。不斷見ると馬鹿々々しいまでに大きな體の持主であるその人も、あの瞬間に於てのみは少しも大きいといふ感じを與へない。縮まれるだけ縮まつてゐる。肉體のあらゆる部分に力が充實して、すべての筋骨が緊縮してゐる。恐らくあの瞬間に於ては、強弓の矢をも、彼等の肉體は弾き返すであらう。石を投げつけても傷つかないであらう。

だからこそ、角力を見るに巧者な人は、あの瞬間に於て既に勝負を見定めることが出来るのである。試に互に睨み合つた瞬間に於ける力士の體軀と、待つた！といつて手を引き、立上つた瞬間の力士の體軀とを注意して比べて見たまへ。その間に何といふ驚くべき相違の有ることであらう。

内部に籠められた力に於て勝る時、人は往々戦はずして勝ち、闘



文覺

俗名遠藤盛遠  
平安末期より鎌  
倉初期にかけて  
の僧  
山城國高雄神護  
寺に住した  
正治元年（八五）  
寂  
年八十

はずして他を服せしめることが出来る。西行法師を打たうとした荒行者の文覺が、西行法師の姿を見ただけで、その尊嚴にうたれて平伏したといふ話もある。徒に外部へ外部へと現れ出るもろくの力よりも、内に籠つて「信」となつた靈の力の如何に偉大であるかについての實話は、昔から數多くある。私たちはそこにもよく縮むものの弾力の強さを認め得るのである。しかし、今日の社會を見渡す時、私たちはあまりに多くの人々が、徒に外部への力の濫費をしつゝあることを見る。かの石川啄木の歌のやうに、まだ咲くだけの力の充實に達しない花の蕾を火にあぶつてまでも咲かせようとしてゐるやうな焦燥に、あまりに多くの人々が煩はされすぎてゐる。安價な力の表現のいかに多すぎることよ。

此の意味に於て、私たちは現代の社會に向かつて、經濟上の緊縮以上に、肉體上の又精神上の力の緊縮の必要を感じずる。よく縮むものの強き弾力、それが今の社會には甚だ乏しい。角力でいふならば、睨み合ひが十分でない。ろくに睨み合はないうちに、いゝ加減に角力をとつてゐるやうな人があまりに多い。力を外へ働かすことばかり焦燥してゐる、内に力を充實させることを忘れてゐる。根強い働がなく、奥深い思考がない。つまり底力のある人や、底力のある働に乏しい。底力のないといふことは、内奥に籠められてゐる力がないといふことである、其の緊縮と充實とがないといふことである。

（靜と動との間）



田中寛一

心理學者  
文學博士  
東京文理科大学  
教授兼東京高等  
師範學校教授  
明治十三年(三四)  
○岡山縣生

二五 日本民族の覺悟

田中寛一

日本民族の前途は洋々として希望に満ちて居る。

併しこれは可能性である。この可能性を實現するには民族の各員の思慮と努力とを必要とする。徒に日本民族の優越性を自負したり、外國人の言動を摸倣してゐたのでは實現は出來ない。日本民族の大使命を自覺し、その目標に向かつて精進することによつてのみ達し得られる。

フイエは歐洲各民族について考察した後、その結論として、未來はアングロサクソンのものでもなく、獨逸人のものでもなく、希臘人のものでもなく、將又ラテン人のものでもない。最も聰明で、勤勉で、且最も道德的なものの掌中に歸すべきである。といつて居る。日本民族の將來を思ふものは當にこの言を服膺すべ

フイエ  
佛國の哲學者  
(西曆一八三三)

きである。

余は嘗て民族の將來に對する心理的條件を述べて、歡樂を追及し、贅澤に耽ることが、直接には民族を懦弱ならしめ、不道德に導き、物質尊重主義に傾かしめ、間接には人口減少を招來することを力説した。これは現代歐米諸國における一つの通弊であつて、我が國にもその潮流は刻々に押寄せて來て居る。「武士は食はねど高楊枝」の代りに「マーデンの金錢は品性なり」といふ格言を奉ずるものが我が國にも多くなりつゝあるのである。

マーデン  
米國現代の思想  
家

文明の進歩は諸民族間の交通を頻繁にし、個々人相接する機會を多くするのみならず、印刷物等による思想の傳播を容易ならしめる。その結果は各民族とも新しい習慣、新しい思想、新しい



信仰、新しい文藝に接觸する機會が多くなり、在來の道德思想が權威を失ひ、人々の行動がまち／＼になり勝ちである。これは現代の諸民族が經驗して居る所で、各國の指導者が、その頭を悩ましつゝある問題である。思想の混亂、不統一も或場合には進歩の階梯となることがあるけれども、それが極端に走つて一民族の傳統を破壊し去るときには、その民族は自滅するのである。吾等はこの點に於て深く注意しなければならぬ。即ち傳統的な中心思想、中心感情は決して見失つてはならない、外來の思想や感情といふものは、たゞ傳統的なものに磨きをかけて、それを精煉する材料としてのみ用ふべきである。それで、外來思想に對する態度について一言しようと思ふ。

由來、人には古いものは之を棄てて新しいものに就かうとする

心の一面がある。その好奇心を満足せしめつゝ、文化の發達に貢獻する意味で新しい思想の研究をするのは悪いことではない。併し、如何なる思想でも、その起るには相當な理由があることを忘れてはならない。彼の勞農ロシヤの過激思想の如きはロシヤに於て始めて發達すべきものであらう。即ち、時世後れの專制政治に對する反抗心の發露と見れば解釋がつくのである。又中華民國の一部に過激思想に共鳴するもののあるのは、彼等が元來利己的の民族であつて、國家或は民人の安寧幸福といふことは眼中にないものが多いからであらう。總べて、思想でも何でも新しいが故によいといふものではない。これに反して歴史は尊い。蓋し歴史はその民族に適する思想の發現の跡であるからである。同様に風俗、習慣、道德、宗教等も



亦その民族に適するものが生存したのである。この明らかかな事實を無視して、徒に新を追うて外國の眞似をするのは決して賢い仕方ではない。

曾て澤庵亡國論を唱へた人がある。その説によれば、澤庵のやうな滋養分のない消化の悪いものを食つて居れば國が亡びるといふのである。しかるに最近の學者の研究によれば、澤庵にはヴィターミンBをおほく含んで居るので、榮養の上に大切なものだといふことである。前の論者も、徒に西洋かぶれをしないうで、澤庵を長い間食つた日本人が強健に壽命を保つて來たことを考へたならば、あのやうな論は吐かなかつたであらう。西洋崇拜者の議論には此の類のものが多し。注意すべきことである。たゞ我々の反省しなければならぬことは、風俗や習慣な

どの中にはその起る時には相當な理由があつても、時代を経過するに従つてその理由はとうの昔に消滅して、形ばかりが存續してゐることがあるといふ事實である。その様な場合には適當な形に之を改良する必要がある。併し些細な習慣でも、それを變改するときには、その結果として如何なる影響があるかを先づ考へなければならぬ。些細な習慣の變改に對してすら此の様に、慎重に考へなければならぬのである。況や民族の中心思想に影響を及す如き思想の研究者は極めて慎重な態度を執らなければならぬ。

日本民族の唯一の誇とする忠君愛國の精神、而して建國の最初から一貫して居る此の思想はその根ざす所は極めて深い、従つて少數の者の變態思想によつて動搖を來すことはないとは信



ずるけれども、世には附和雷同をするものも少くないことであるから、爲政者と教育家とは大いに注意しなければならない。従來日本人が徒に外國人の行動を摸倣して得々として居たことは苦々しいことであるが、それには大いに理由がある。その原因を探して見ると、二つある。その一つは西洋諸國との交通を開いた當時からの情勢であり、他の一つは日本の文化に對する研究の不足である。

西洋文明の特徴は主として自然科学の研究と其の應用とにあつて眼の前に容易に示されるものである爲に、彼と是との差のあることが解り易い。而もこれは従來日本に最も缺けた點であつた。西洋文明に始めて接觸した吾等の先輩が日本の文明は到底西洋文明に及ばないと感じたのは無理のないことであ

る。其の後、自然科学の研究はその進歩に於て殆ど底止する所がなく、一步否數十歩も後れて居た日本人は、唯單に彼等のやつたあとに追従して行くだけであつた。これが西洋崇拜の主なる原因である。崇拜の結果は一も二もなく總べて彼等の行動はよいものと考へ、それを摸倣すること一日後るれば、一日時世に後れる様に思つて、茲に摸倣に對する競争といふ珍現象を惹き起したのである。誰も彼も一種の暗示にかゝつて、自己を反省することをしなかつたのである。

右の様な情勢であつたから、その自然の結果として、日本文化に特有なものであるか否かをさへ考へるものが少かつた。従つて日本文化の精髓の如何なるものであるかについてはまだ多くの人々は之を知らない。それは一つは自然科学の研究を摸



倣することに較べると著しく困難なことにもよるが、一部の  
人を除いては、これを探究しようとする心さへも起さなかつた  
のである。而してその結果として傳統的の中心思想をさへ失  
はうとしたのである。

併し今や西洋文明の正體も略明らかになり、心ある人々は内に  
自ら省みて、日本民族特有の文化について之を明らかにしよう  
とする様になつた。今後は一方、西洋文化を研究しつゝ、而もそ  
れに囚はれず、他方、日本固有の文化について今一層深く研究し  
てその美點と缺點とを明らかにし、東西兩文明の融合に向かつ  
て大いに努力しなければならぬ。日本民族の大使命を果さ  
うとするには、それだけの努力を惜しむべきでない。

余は西洋文明を自然科学的或は物質的文明といつたが、併しそ

れは一般的の言現し方である。彼にあつても我々の大いに學  
ばなければならぬ多くの精神的訓練がある。殊に日常生活  
に於ける對人的道德或は公衆道德に於て吾々の師とすべきも  
のが少くない。

對人的道德の中で信用を重んずること、時間を守ること、汽車、電  
車等に於ける作法等に於て日本人は遺憾ながら英國人などに  
劣つて居るとおもはれる。併し、是は日本人が先天的に不正直  
であり、他人の迷惑を考へない民族である爲ではない。不正直  
なことについていへば、英國人でも今日の様に世界に濶歩する  
前には随分不正直な者が多かつたのである。度量衡でも正し  
いものがなく、パンの目方を増す爲に鐵の屑を入れて焼いたこ  
ともあつたといふことである。而して外國貿易の發達につれ



て成金者流は單に利益を得ることに汲々として我が國の商業界より一層德義を重んじなかつたのである。然るに「正直は最良の政策」であるといふ教が出来た様に、全く商賣をするには信用第一、正直第一でなければならぬことに氣がついて來て、漸次今日の様に信用を重んずる風をなしたもので、決して最初から信用第一を標語とする國ではなかつたのである。我が國でもまだ外國貿易についての經驗が少い爲、時に見本の品よりも悪いものを輸出する様なことがあるが、今や漸次眼覺めて來て居るから、遠からず信用第一の國になるであらうと考へる。

時間を守らないことについても次第に改善されて居るが、まだ十分でない。これも社會生活に慣れない結果であつて、今後の經驗によつて、結局は時間を嚴守することが自他の利益である

ことを會得する様になるであらう。併し、これも自然の發達に任せないで、その改善を促進する様に心掛けなければならぬ。電車、汽車等に於ける作法に於ても、まだそれらに對する訓練を受けることの日が浅いために、他人の迷惑を顧みない態度が多いのであつて、日本人が先天的に不作法なのではない。又處構はず痰唾を吐くことも不作法の一つであるが、これは肺結核の慘害を味はつて居る日本民族にとつては、不作法といふことの外に公衆衛生といふ見地から特に注意を促す必要がある。要するに日本人の公衆道德上の缺陷は廣い範圍の社會生活に慣れないことから來るものが多いが、その理由で之を恕する譯には行かない。最高文明の建設者としては、此等の點に於ても亦優れて居なければならぬ。



今一つ注意すべき重要なことは科學の研究とその應用とについてである。我々は精神文化を高調するけれども、それと同時に科學的研究とその應用との重要をも認めるものである。日本には外國にない様な尊い文化があるけれども、それだけでは優越民族にはなれない。その上に更に科學的知識を利用して生活の改善と能率の増進とを企てなければ、到底今日の世界の舞臺に立つて競争することは出来ない。殊に我が國の如く天産物に於て餘り恵まれて居ない國では、生産の人的要素に於ける科學的知識の應用を一層努めなければならぬ。此の點については、我が國は近時著しい進歩を見たけれどもなほ十分とはいはれない。

將來の大文明を荷なふ爲には日本民族の努力すべき尙多くの事項があるであらうが、要は現實に即しつゝ、高遠の理想を追求せねばならぬのである。余は上述の事柄を總括し更にそれに關聯した數語を加へて我人の誠としたい。長を採り短を補へ。これは日本民族の傳統的精神である。この精神を實現するには西洋文明について學ぶと共に日本固有の文明について一層深く究めて、そのよい點と悪い點とを明らかにしなければならぬ。我等の力と使命とを自覺せよ。而して貧しいことを悲しむことなく、つとめて歡樂から遠ざかれ、「自己を愛するものは亡びる」といふ訓言に聽け。



子孫の爲に自己を苦しめよ。一人よりも二人、二人よりも三人、三人よりも四人五人と、より多くの子寶をもて。然らば、その中から偉材の輩出する蓋然率は増すであらう。偉材こそ民族の寶である。平時にも戦時にも最も必要なのは多數の偉材である。

精神と共に身體を鍛へよ。心身の健全は日々の能率を増す資本であり、文化向上の源泉である。

志を固く持て。忠孝一致、忠君愛國は古來一貫した日本民族の中心思想であり、大和魂である。如何なる學說にも、我が民族にとつてこれに優る思想はない。

教育の振興と産業の發達とは國防の確立と共に民族發展の基礎である。各自その適する所について各、その素質を發揮して

最高文明の生産といふ日本民族の大使命を完成せよ。

四海同胞主義は人類究極の理想である。日本民族の精神文化の宣揚によつて世界人類を導いて協調の道程に上らしめなければならぬ。けれども正義は常に之を擁護する覺悟を必要とする。正義の戦に對する準備なき民族即ち現實を忘れた民族は結局高遠の理想に達し得ない。

現實に即しつゝ、而も高遠の理想に向かつて精進せよ。これ日本民族の大使命を果す唯一の條件である。(日本民族の將來)



# 師範國文 第一部用 卷五終

(略名) 吉田師國

昭和十六年十一月十日  
 昭和十五年十一月十日  
 昭和十四年十一月十日  
 昭和十三年十一月十日  
 昭和十二年十一月十日  
 昭和十一年十一月十日  
 昭和十年十一月十日  
 昭和九年十一月十日  
 昭和八年十一月十日  
 昭和七年十一月十日  
 昭和六年十一月十日  
 昭和五年十一月十日  
 昭和四年十一月十日  
 昭和三年十一月十日  
 昭和二年十一月十日  
 昭和元年十一月十日

師範國文 第一部用 全十冊	金六十錢
卷二、三、四、五、六、八	金五十七錢
卷七	金五十五錢
卷九、十	金五十五錢



著者 吉田 彌平  
 補訂者 石井 庄司  
 發行者 東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
 中等學校教科書株式會社  
 代表者 山本 慶治  
 印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
 大日本印刷株式會社  
 石村 勳

發行所

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
 中等學校教科書株式會社  
 日本出版文化協會會員番號・一一七五二二

配給元 日本出版配給株式會社  
 東京市神田區淡路町二ノ九





30  
予  
#





廣島師範學  
豫科第三學  
平井

広島大学図書

2000301921



庫  
1  
21

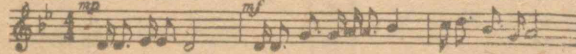


身はたとひ武蔵の野邊に

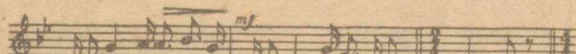
Largo ♩=40

雄壮に、しかし毅然として

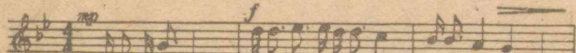
吉田松陰 作詞  
箕作秋吉 作曲



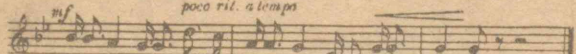
みはたとひ むさしののべに くらぬとも



とどめおかましやまとだましい



みはたとひ むさしののべに くらぬとも



とどめおかましやまとだましい

歌曲『愛國百人一首』

2

身はたとひ武蔵の野邊に くらぬとも  
留め置かまし日本魂

作曲・箕作秋吉  
吉田松陰